

2016 年度社会構築論系
地域・都市論ゼミ 2 ゼミ論文

地域構造の成立過程と維持変容を探る
—鎌倉市北鎌倉地区を例に—

主査 浦野正樹教授

早稲田大学 文化構想学部

社会構築論系 4年

浦野ゼミナール所属

1T130160-0

内田 湧水

目次

序章	4
序-1 問題意識／研究目的	4
序-2 調査対象地	4
序-3 研究方法	4
序-4 論文形式	4
1章 鎌倉・北鎌倉の概要	5
1-1 基本情報	5
1-1-1 鎌倉について	5
1-1-2 北鎌倉について	5
1-2 沿革／歴史	6
1-2-1 鎌倉・室町・江戸時代	6
1-2-2 明治・大正時代	7
1-2-3 昭和・戦後期	9
2章 北鎌倉の特徴	11
2-1 データ・都市計画からみる北鎌倉	11
2-1-1 山ノ内地区の概要	12
2-1-2 台地区の概要	16
2-1-3 都市計画からみる北鎌倉	17

2-2 落ち着いた街	19
2-2-1 門前町として.....	19
2-2-2 現代に残る門前町・商店街	20
2-3 緑に囲まれた街	20
2-3-1 地理的に見た北鎌倉	21
2-3-2 山の形式	22
2-3-3 「歴史的風土」と「里山」	22
3章 他都市との比較分析	24
3-1 鎌倉と京都の「外からの視点」	25
3-2 鎌倉と京都の「内からの視点」―北鎌倉と六角町を例に―	25
4章 北鎌倉地区についての考察	28
5章 北鎌倉の重層的な地域構造	29
5-1 地域変容過程の分析	29
5-2 北鎌倉「らしさ」と今後の北鎌倉	30
終章	32
終-1 総括・意義	32
終-2 謝辞.....	34
参考文献・資料・URL	35

序章

序-1 問題意識／研究目的

私の実家は神奈川県鎌倉市今泉台にあり、最寄り駅は北鎌倉駅である。北鎌倉駅を出ると左手には円覚寺、右手には東慶寺・浄智寺。左手に折れ明月院の横を通り坂を登ると今泉台地区に入る。幼い頃から、これら禅宗寺院と自然に囲まれた閑静な住宅街は身近なものであった。「北鎌倉」地区は市で言えば鎌倉市、ならびに地域区分では大船地区に該当する。しかし、個人的な経験から、武家の古都である鎌倉、ならびに交通の要衝で繁華街である大船地区と「北鎌倉」地区が同列に扱われることに違和感があった。実際、「鎌倉」という言葉からは「武家の都」「禅宗寺院」「海」「山」「湘南」「別荘地」「住宅地」などさまざまな言葉が連想されるだろう。そこで、本稿では「鎌倉」とも「大船」とも違う「北鎌倉」地区に焦点をあて、北鎌倉の地域構造を明らかにした後に、北鎌倉の地域構造がどうして生じたのかを他都市と比較しながら明らかにしていきたい。

序-2 調査対象地

一般的に「北鎌倉」と呼称される神奈川県鎌倉市山ノ内・台地区、ならびにその周辺地区を調査対象地とする。本論では山ノ内・台地区ならびに背後の六国見山・台峰を含め「北鎌倉」地区として扱う。また、特に注のない場合、大船とは神奈川県鎌倉市大船、大船地区とは神奈川県鎌倉市の地域区分(今泉・今泉台・岩瀬・大船・小袋谷・台・高野・山ノ内)のことを指す。また鎌倉市の中心部であり、鎌倉時代から発展した都市地域である鎌倉七口の内側の地区(雪ノ下・小町・大町・由比ガ浜・長谷等)を「旧鎌倉」と呼称する。

序-3 研究方法

- ・文献調査
- ・まちの関係者へのインタビュー

調査方法については、主に文献調査、フィールドワーク、ヒアリング調査をもとにして研究を進めていった。文献については、早稲田大学内の図書館や鎌倉市中央図書館、鎌倉市役所内のデータを用いた。また、鎌倉市のタウン誌や鎌倉のNPO団体の機関紙、観光雑誌なども参照に多面的な調査を行った。フィールドワークでは、「北鎌倉」とされる山ノ内地区・台地区ならびに周辺の六国見山・台峰周辺で調査を行った。また、山ノ内地区・台地区の歴史・現在についてはヒアリングを実施し調査した。ヒアリング調査には、鎌倉市中央図書館近代史資料室の平田恵美様、北鎌倉湧水ネットワーク代表の野口稔様、北鎌倉商栄会会長の関本敏子様、北鎌倉山ノ内地区町内会協議会の辻政治様、台峰緑地保全会の川上克己様、NPO 法人タウンサポート鎌倉今泉台理事長の丸尾恒雄様、山ノ内中町北町内会会長の山田稔(海人)様、副会長の栗原隆司様、栗原絵里子様等にご協力をして頂いた。

序-4 論文形式

1章では鎌倉市、並びに北鎌倉地区の概要・基本情報・歴史を記述する。2章において、北鎌倉地区の現在の地域区分である山ノ内・台の詳細を明らかにしたのち、地域の都市計画について記述する。そののち、北鎌倉地区の特徴を「落ち着いた街」「緑に囲まれた街」の2点とし、その構成要素である門前町・商店街・歴史的風土・里山について特徴といかにその要素が形成されたかについて近代から歴史を追い明らかにする。3章では2章で明らかにした鎌倉市、北鎌倉地区の地域構造を京都市、六角町と比較し社会的に再検討する。4章では北鎌倉「らしさ」とそれを生み出す諸要因についてまとめ、5章では今後の北鎌倉について言及したい。

1章 北鎌倉の概要

1-1 基本情報

1-1-1 鎌倉について

鎌倉市は面積39.53km²、人口17万4000人の都市である。神奈川県南東部に位置し、都心から40km圏に位置し「古都」として知られている。そのため、観光都市としても著名であり、毎日多くの観光客が日本人・外国人を問わず訪れ、修学旅行のルートとしてもメジャーである。また近年は東京近郊の緑豊かな住宅都市として人気が高まっており、リクルートグループが企画している「関東住みたい街ランキング」では総合ランキングで鎌倉は14位、行政市区ランキングでは鎌倉市が8位にランクされている。これらにより、多くの人びとに鎌倉は上記の「観光都市」「緑豊かな住宅都市」としてイメージされている。実際株式会社ゲイン(現:株式会社モニタス)が行った全国都市ブランド力調査報告書¹で鎌倉は行ってみたい都市8位であり、住んでみたい都市・好きな都市では上位三位以内にランキングされている。また、同調査によれば、鎌倉は歴史・伝統・古風イメージを持つ個性的な街であるとされているが、おそらくこれが多くの人びとのもつ「鎌倉」に対するイメージである。この歴史・伝統・古風イメージは鎌倉時代、鎌倉に幕府が所在し日本の政治の中心であったことに由来するものだろう。法制度上では「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法(古都保存法)」にて京都市(平安京)、奈良市(平城京)、斑鳩町・天理市・橿原市・桜井市・明日香村・逗子市・大津市と並んで「古都」と指定されており、その中でも初期に指定された京都市・奈良市と比較されることが多いように思われる。

一方で、上記の歴史・伝統・古風なイメージのほとんどは旧鎌倉、もしくは北鎌倉地区から連想されるものである。下記の図の通り、鎌倉市内は幕府が所在した旧鎌倉、建長寺・円覚寺らの門前町である北鎌倉のような歴史的都市だけでなく、東海道本線が開通したことで交通の要衝となり、現在は商業集積が進み繁華街・工業地・住宅街と雑多な顔を持つ大船市街地域を含んでいる。また鎌倉は鎌倉幕府消滅後の騒乱で歴史的資産の大半が破壊されてしまい、明治時代以降保養地・別荘地として、また東京のベッドタウンとして開発されてきた歴史を持つ。そのため、京都や奈良と比べると歴史的な「まち並み」の集積が少ないことが特徴となっている。

1-1-2 北鎌倉について

「北鎌倉」という言葉・地区に決まった定義はない。鎌倉三日会²の機関紙である『鎌倉市民』1965年3月号によれば

北鎌倉という呼び名は、もともと土地固有のものでもなければ、町名でもない、北鎌倉という名の駅ができてから、それを中心にした一帯、町としては山ノ内の大部分と台の一部を含む地域を漠然とこう呼んでいるのである。

とされている。また

この地域は行政的にはもとは北鎌倉郡大船町に属していて鎌倉市に合併されたものだが、地域的性格としてはもともと大船より旧鎌倉の抜き差しならぬ一部といつてよく、しかも、それでいながら、旧鎌倉のうちでも、また一種独特の環境をつくつているところである。(中略)この独特の環境を支配しているものは、何といても円覚寺、東

¹ 首都圏に居住する人を対象に、全国の都市のイメージを測定し、数値化することにより、都市のブランド力における資料を得ることを目的としたもの。鎌倉を含む全国41都市が対象。2006年実施。

(<http://www.gain-www.com/admin/files/toshibrand-report.pdf>)

² 『鎌倉三日会』は昭和26年に発足した、鎌倉の市民団体としては「鎌倉同人会」について古いとされる、市政に関心のある市民のあつまり

慶寺、浄智寺、建長寺などの古い寺院であろう。これらの寺は何れも深い樹木に被われた山に包まれ、それぞれその存在の意味を強調しており、それらがまた一つのアンサンブルとなつて「北鎌倉」になっているのである。「北鎌倉」はこれらの寺なしには考えられないし、これらの寺はこの自然の環境なくしては無意味なものとなる。

とされている。また、「北鎌倉の景観を後世に伝える基金」の機関紙『北鎌倉の風』創刊号の藤井経三郎氏の記事によれば

北鎌倉の横須賀線に沿って、両側に黝ぐるとそびえる円覚寺門前の杉木立ちを、鎌倉の門と称したのは大佛次郎である。北鎌倉の駅に着くと車窓から流れ込む樹々の香りや鳥の声に、来訪者はああ鎌倉にやってきましたと胸をときめかせ、鎌倉に住む人はああ鎌倉に帰ってきたとほっとする。まさしく北鎌倉は鎌倉の門であり、玄関である。それだけでなく禅宗文化をほうふつとさせる白壁、木組み、瓦屋根の民家が点在し、真近な山なみとともに、北鎌倉は鎌倉よりも鎌倉らしい。

とされている。また「北鎌倉」と大勢の人から認められている「山ノ内」地区に対しては

山内荘の一部山ノ内、現在の北鎌倉は鎌倉の外地である。その後この地を重視した時頼によって山内道が整備され、建長寺はじめの禅宗寺院が建立されるが、私は外地なればこそ山ノ内の重要性が高まると考える。すなわち防御のために山を掘り切った切岸は、外側に断崖をつくり、内側には階段状の宅地を造成する、いわば自然の大破壊による大規模開発で、今でこそ豊かな緑に覆われているものの、当時は荒々しい岩肌に囲まれた超過密の都市風景が広がっていたに相違ない。それに反して外地の山は自然と共生する、いわゆる里山であって、谷戸は水田や畑地となり、食料や水、薪炭の供給地として過密都市鎌倉を支えたと考えられる。北鎌倉に多い湧水もいのちの水として脈々と現在に継承されている。台峰など北鎌倉の山の重要性は、鎌倉の破壊に対して共生という、対比的な歴史と自然にあるのではないか。

と記している。これによれば、現在の山ノ内地区だけでなく、山ノ内地区に隣接した台峰や六国見山等の自然も「北鎌倉」地区の一部として捉えることができるだろう。本稿では北鎌倉に関連する地区として現在の町名でいう「山ノ内」「台」地区、そしてその周辺の山々を取り上げる。「山ノ内」は円覚寺・建長寺を中心とした禅宗寺院とそれに付随する門前町であり、「台」地区はその周辺の農村であった。しかし、明治以降の宅地開発の流れで地域は大きく変容し、ここ数年での変化も著しい。この概要を次節以降で取り上げる。

1-2 沿革／歴史

1-2-1 鎌倉・室町・江戸時代

北鎌倉は鎌倉の「外地」である、とされる。まず、鎌倉の内地である旧鎌倉地区について触れなければならない。

鎌倉を紹介するとき、三方を山に囲まれ、南の一方のみが海に開く天然の要害である、と紹介されることが多い。実際、東・西・北のいずれから鎌倉に入るとしても山を切り開いた切通し(いわゆる「鎌倉七口」)を通らねばならず、「攻めるに難く守るに易い」土地であった。また、鎌倉を代表する人物として鎌倉幕府の創設者である源頼朝が挙げられる。源氏と鎌倉の関係が始まったのは、源頼朝の5代前、頼義の時代からとされている。源氏は氏神として八幡神を信仰していたが、頼義は京都岩清水八幡宮の分霊を鎌倉由比ガ浜近辺に祀った。これが現在の鶴岡八幡宮の源流である。源頼朝は1180年に鶴岡八幡宮を現在の地に移し、それを中心に都市計画を構想し、鶴岡八幡宮から由比ガ浜の方へ延びる「若宮大路」をはじめとした道が整備され、人も居住し始め「武家政権の本

抛地」としての鎌倉が成立した。通常、旧鎌倉とは鎌倉時代前期に武家政権の都市として発達した部分、いわゆる「鎌倉七口」の内側を指すといわれている。

一方、「北鎌倉」の中心である山ノ内が歴史上有名になるのは鎌倉時代中期、執権北条氏の統治期からである。山ノ内は当時山内荘という現在の鎌倉市西北部から横浜市戸塚区・泉区・栄区の一部にわたる広大な荘域の一部であった。山内荘が開発されたのは藤原氏北家の所流で八幡太郎義家の家人、山ノ内首藤資通の孫、俊通の時代である。俊通は鎌倉の西北方の地を開発して山内荘を立荘し、以後この一族は山ノ内首藤氏を称し、その武士団は山内党の名で知られるようになったとされる。源頼朝は治承四年(1180)十月、当時の山内荘の領主であった山ノ内首藤経俊から山内荘を召し上げ、これを土肥実平に預けた。その後建保元年(1213)五月和田合戦が起こり、和田義盛討伐の行賞として山内荘を北条義時に与えられ、それ以後北条氏は山内荘を私領とするに至ったとされている。

北条氏は山内荘を所有することで、広大な荘域がもたらす莫大な収入だけでなく、鎌倉に隣接している地理的条件がもたらす軍事上の利点を得る事になった。荘内に鎌倉街道の上の道と中の道の二本が通っており、いつでも北条氏は鎌倉に軍を出すことができたのである。以後、山ノ内は重要視され代々北条氏の嫡流のものとなる。1237年に執権北条泰時によって常楽寺が開基され、その後1253年に執権北条時頼により建長寺(鎌倉五山第一位)、1283年に執権北条時宗により円覚寺、同年に浄智寺、1285年に北条時宗婦人により東慶寺が創建されるなど、山ノ内には禅宗寺院が立ち並ぶようになっていった。1336年足利尊氏によって開基された長寿寺、1380年、関東管領上杉憲方によって創立された明月院、1704年に山ノ内に移された円応寺等もあわせて、山ノ内のほとんどの寺院が禅宗寺院である。一方、山ノ内地区の西北にある光照寺は時宗であるが、これは時宗を布教するために鎌倉を目指した一遍が鎌倉入りを幕府に拒絶され、やむなく野宿した跡地に建設されたとされている。このことは山ノ内が「鎌倉」の外であったことを裏付けている。

山ノ内が北条氏の私領となり、禅宗寺院が建設され始めた頃から、そこには僧院の経営にたずさわる多くの僧、反俗、俗人が集まるようになった。保護者が北条、足利、後北条、徳川と変わっても寺は宗教的権威として重んじられた。後北条滅亡後関東の領主となった徳川氏は各地に分散していた寺社領の整備を行い、山ノ内の大半が円覚寺と浄智寺領になった。(建長寺は小町と十二所、東慶寺は十二所、二階堂)当時、山ノ内は建長寺・円覚寺の門前が南北に貫かれた道の両側に発達し、東慶寺・明月院・浄智寺の門前にわずかな領民が住んでいた。したがって、山ノ内の門前町は円覚寺・建長寺に集中していたといつてよい。また、上記の理由により建長寺前の住民も円覚寺領民であったため、山ノ内地区の多くの住民は円覚寺領民であった。円覚寺領民と他の農村住民との違いは、円覚寺領民は円覚寺門前町という街場的な経済に支えられている点であった。円覚寺領民については、「鎌倉の社寺門前町 木村彦三郎 鎌倉近代史資料第五集 平成三年」に以下のように書かれている

「住民構成から見ると、円覚寺創設以来の工匠、行者をはじめ、寺役人(目代とよばれる)、典医(寺抱えの医者)など、寺から直接扶持をもらって生活している家や、紺屋、鍛冶、木挽、石工、桶屋、仏師、畳屋、塗職、屋根職、武具などの諸職人。紙屋、糸屋、扇屋、釘屋、炭屋、板屋、ろうそく屋などの商人。酒屋、醤油屋、糍屋、餅屋、菓子屋、油屋などの食料品。湯屋、旅籠、小料理店などの接客業。質商(四軒)、などがあったことが、記録からうかがえる。このように円覚寺門前町の領民は兼業として成り立つ仕組みによって支えられていた。鎌倉のうちでもこれほど商人や諸職人、接客業、質屋などが集まっている村は江戸時代にはなかった」

とされている。また、当時の円覚寺は各地からの人が集まる観光名所ではなかった。上記の住民構成からも、観光だけでなく寺社・地元住民による経済活動が行われていたことがわかる。明治維新後は寺社の特権も失われ円覚寺も塔頭20余を数えていたが、明治四年の寺領の上知以後は急速に衰え、半数以上が廃院となった。寺に依存していた門前住民にも影響はあり、新しい職業に転じる人々、新天地を求めて他出する人なども見られたが、あらかたの人は保守的であったとされる。明治九年の山ノ内地価書上帳にも工匠、石工、紙屋、ろうそく屋、畳屋、万屋、菓子屋、糍屋、炭屋、紺屋などが残っており、明治維新を迎えても大きな変動は見られず、今日に至るまで

家業的な商店街の一部は継続していくことになる。円覚寺を中心とした門前町、特に家業を中心とした「匠の町」として発達していたといえよう。

一方で、鎌倉時代・室町時代には武家政権の関東における中心地として栄えてきた鎌倉ではあるが、1438年の永享の乱以後関東に戦国時代が到来すると街は荒廃し、関東における中心都市の座を後北条氏の小田原、そして江戸時代、それ以降の中心都市であり幕府が置かれた江戸に奪われ、現在に至るまで歴史の表舞台に登場することは少なくなる。江戸時代、江戸幕府初代将軍の徳川家康期には鎌倉は「相模国小坂郡鎌倉の内」と呼ばれ、従来の鎌倉(雪ノ下・扇ガ谷・乱橋・本郷(大町)・浄明寺・小町・二階堂)に山ノ内と極楽寺が加わった地区のことを指した。この呼び名もコロコロと変わり、二代将軍の秀忠期には「相模国鎌倉」となり三代将軍の家綱期には「鎌倉郡」と呼ばれている。また4代将軍の家綱期には大船地区も鎌倉郡に加わり、現在の鎌倉市に近い領域が鎌倉郡と呼ばれるようになった。当時は近くの宿場である戸塚宿と藤沢宿への助郷役を担うさびれた農村であったようである。

1-2-2 明治・大正時代

(i) 明治時代

寂れた寒村が再び注目を集めるのは明治時代中期に入ってからであった。1887年、横浜-国府津間開通によって藤沢停車場開通。翌年横須賀線開設が決まり、東海道線と横須賀線の分岐点である大船信号所が大船停車場として完成。そして1889年に横須賀線開通、鎌倉駅が誕生すると、鎌倉は東京の通勤圏となった。自然が多く残る鎌倉は東京に近い海浜保養地として人気を呼び、旧鎌倉の海岸付近に別荘が立ち並ぶようになった。また由比ガ浜の海水浴場が整備され、明治30～40年代には電話や電灯の設置がなされ、また夏の避暑客が集まる時期には欧文電報や公衆電話の使用も可能となり、都会的繁栄を享受するようになった。また同時期に多くの名士や文士が鎌倉に居住し始め、(鎌倉文士という言葉が生まれるようになる)、歴史・自然・文化の町としての評価を確立することとなる。

横須賀線は軍港のある横須賀へのアクセス路線である。横須賀へのアクセスが良く、自然が残り、東京へもアクセス可能な鎌倉には軍事関係者が居住し始め、北鎌倉も例外ではなかった。台地区の一部には横須賀海軍士官の高級住宅街が立ち並ぶようになり、現在もその付近には通称「海軍通り」という通り名が残っている。山ノ内の門前町商店街もこれまで通りの寺社仏閣の御用達以外にも、高級住宅街への配達で生計を立てていた店もあり、門前町としてだけでなく名士や文士、海軍士官らが居住する高級住宅街という面も持つようになった。一方で、高級住宅街化・別荘化は鎌倉の一部でしか進行しておらず、明治30年代前半では鎌倉郡の農家戸数が総戸数の8割を超えていた。北鎌倉でも農家は多く、山ノ内近辺では米・麦・綿を産していたとされる。

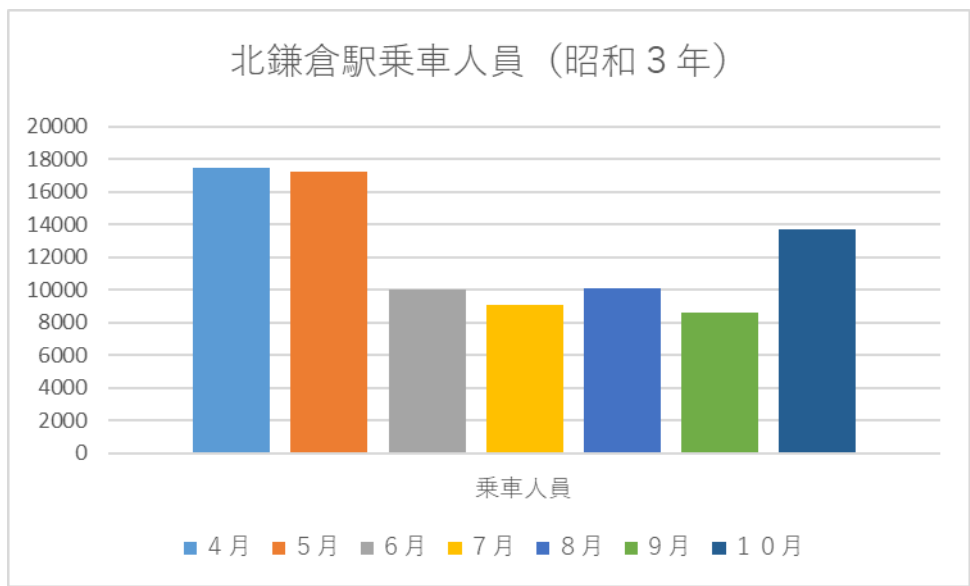
また、観光面でも鎌倉は脚光を浴びるようになる。鎌倉駅が建設されると、鶴岡八幡宮等が残る旧鎌倉は東京都心に居住する人にとっての観光地となった。また鎌倉中心部だけでなく山ノ内にまで人の足が伸びるようになった。北条・足利・徳川各政権によって保護されてきた税金に関する特権を、廃仏毀釈を押し進める明治政府によって失った建長寺は経済的打撃が激しく(寺領上知と祠堂金禁止)、観光客を呼び寄せるために明治23年5月に裏山を開発して、遠州秋葉山半僧坊大権現を勧請分祀した。これが成功し、参詣者が増えたため、建長寺門前は半僧坊に来る客を相手にする商売である水商売、掛茶屋が増え、大繁盛した、という記録が残っている。いずれにしても、この時期に現在の鎌倉の「観光都市」「緑豊かな住宅都市」としてのイメージが成立し始めたといえよう。

また、行政区分では明治初期、神奈川県が誕生した際、山ノ内は小坂村に編入される。明治40年代に山ノ内では鎌倉町(旧鎌倉)への編入運動が加速したが実現には至らず、その後大船町に編入され、現在に至るまで大船地区の一区分とされることとなる。

(II) 大正・昭和初期

関東大震災による地震・津波で鎌倉は甚大な被害を受けた。北鎌倉は津波の被害は受けなかったものの、地震による被害は甚大であり、建長寺仏殿・浄智寺仏殿・東慶寺本堂・円覚寺舍利殿等各寺社仏閣の主要建造物の殆どが倒壊した。被災して家を失った多くの人が鎌倉を去ったと思われるが、意外にも被災後鎌倉の人口は増加している。他の被災地から鎌倉へ流入する者が多く、復興も急速に進んでいたからだと考えられる。上下水道や道路橋梁の復旧工事は政府からの助成金が投入され、被災した多くの文化財に対しても経費は国の補助によって、それぞれの専門化の手により修理・保全の方法が講じられた。特に円覚寺の舍利殿・建長寺の昭堂等は特別保護建造物とされ、大正14年10月には修復工事完了・竣工している。

また、震災の傷が癒えはじめるに従い、人口の増加した山ノ内地区に停車駅を求める運動が加速していく。大正15年、大船―鎌倉の中間にあたる円覚寺前に夏季簡易停車場の設置を求める願書が鉄道省に提出された。その背景として①鎌倉地域から横須賀工場への通勤者が多い上、近隣の学校への通学の面から見ても、現状のままでは交通が不便であること②円覚寺周辺の村から鎌倉海岸へ至る交通の便がないこと③建長寺・円覚寺に座禅修養や参詣のため訪れる人びとにとって、鎌倉駅から小袋坂を越えることは困難を伴うこと④夏の海水浴客などが「夏季簡易停車場」で下車し円覚寺から建長寺・鶴岡八幡宮・鎌倉宮・大仏・長谷観音・江ノ島などを巡覧して藤沢へ至れば「大鎌倉」の見学に好都合であること、などが挙げられている。この企画が実り、北鎌倉駅は昭和5年に常設駅化する。下記のグラフは昭和3年の北鎌倉駅の乗車人員推移である。夏季と比べ春季秋季の乗車人員が多いが、これは春秋の観光シーズン・および修学旅行期に観光客が北鎌倉駅を利用したことによるものと思われる。また、この時期に鉄道だけでなくバス網も整備された。昭和13年の鎌倉町役場「一定路線に依る乗合自動車調」によれば湘南半島自動車株式会社のバスが現在の大船駅から北鎌倉駅を經由して鎌倉駅に至るルートで運行している。また日本自動車道株式会社は昭和初期には鎌倉遊覧バスを走らせており、そのルートは「北鎌倉駅―円覚寺―(鶴岡)八幡宮―大塔宮―長谷観音―鎌倉(大仏)―鎌倉駅」という現在の鎌倉観光の定期ルートに近いものである。この時期に、北鎌倉は「鎌倉観光」の一部、および鎌倉の入り口として捉えられるようになったと考えられる。



(グラフ 1-1 鎌倉市史<近代通史編> より筆者作成)

1-2-3 昭和・戦後期

第二次世界大戦の戦災を受けなかった鎌倉は、自然環境がそのまま残ることや、交通の便のよさ、歴史的都市としての知名度の高さから開発の手が入るようになる。大船―北鎌倉―鎌倉を結ぶ鎌倉街道は明治時代初期には馬車も通れない道(明治6年の鎌倉行幸の際、馬車が通れなかったため明治天皇は馬に乗って行幸したとされる)であったが、戦後すぐには1.5車線道路に整備されていた。この時期では鎌倉街道を通る車は1時間に1本

程度のバスのみであったが、昭和30年代には道路の両脇をセットバックさせることで現在の2車線道路が完成し、電車・車の二つの手段で北鎌倉に来ることが可能になった。そして、昭和35年ごろから「昭和の鎌倉攻め」といわれる宅地ブームが始まった。宅地造成への反対運動、特に御谷地区の造成に対する反対運動で、後の古都保存法制定につながったとされる市民運動を御谷騒動と呼んでいる。

御谷地区は鶴岡八幡宮の裏山であり、源頼朝が幕府開設にあたって八幡宮の重要役職の一つに加えた公僧の宿坊が25ヶ所あったことからこれを敬って「御谷」と呼ばれていたところであり、風致上、歴史上、また植物学上にみても最も重要な史跡であった。この騒動は御谷地区の宅地開発の話が持ち上がったところ、宅地開発に反対する一般市民、学者、僧侶など多様な地域主体が立ち上がり、わずか一週間で2万を超える署名を集めて県市に宅地開発反対の陳情をおこない、さらに募金運動へと広がっていった騒動である。そして、昭和39年1月から12月までの1年間にわたる根強い話し合いの末、開発をしても予定の利益を得られない条件付の宅造許可が下り、事業者の開発断念と、(財)鎌倉風致保存会の残地買収をもって反対運動は終わったとされる。この運動と同時期に、京都・奈良でも同様な問題が発生していたため、乱開発から古都を守ろうとする動きが高まり、関連各市それぞれ古都保存の団体が組織され、活発な運動を展開されるようになった。その結果、これまでも文化財保護法、自然公園法などに基づく各種の施策が講じられていたが、これらの法律をもってしても到底古都を開発から守ることはできないという認識から、古都3市(鎌倉・京都・奈良)を中心とする「古都保存連絡協議会」が結成され、古都における歴史的風土の保存を目的とする総合的な施策として、特別の立法措置を講じるよう、国に対し要望が行われた。これらの運動に連呼して、昭和41年、関係都市選出の国会議員を中心として、超党派の議員立法として「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法(古都保存法)」が制定されている。このように、御谷騒動は現状の古都保存法の起点となった画期的な住民運動であった。

御谷騒動の特徴のひとつは、開発に反対する地元の一般住民だけでなく、運動が鎌倉市在住の文化人・著名人などの強力な賛同を受けたことである。「ただの住民運動」でなく、文化人・著名人による賛同・拡散があったからこそ古都保存法が制定されたとも考えられる。たとえば、鎌倉雪ノ下在住の作家大佛次郎は随筆や主張を地元紙や全国紙に投稿している。以下一部を引用する。

二十五坊の山の森(筆者注:御谷の森のこと)や、建長円覚寺の裏山の自然が気づかわれてから久しい。こわす人たちは、土地の人間でないから、未練を感じない。容赦もしない。私がいつも楽しんで見上げる美しい木立ちも森も、いつまである運命かわからない。個人なり会社の財産なので、どう処置しても許されるわけだが、今は一種の人災というより他はない。建設の名で行なう破壊なのである。そのために、一般の人たちが朝夕に鎌倉に感じている魅力が破られ、失われて行くのである。国家なり中央の政府が風致地区を設定する。それと認定しただけで保護する手段を自治体にまかせきりで、経済的に助けてくれるものでもない。(中略)伝統のある土地の近代化の問題は、どこでも起こっている。日本人が自然を愛する国民だと言うのも実は今日は当たらない。歴史を重んじる性質だと言うのもうそである。土地が狭く人口ばかり多いせいも、我々は昔から実利的で、利己的である。貧しいながら植え木を育て、歴史あるものに敬意を抱いたのは圧制の下にも静かだった封建社会の間だけのことであろう。ほんとうは我々は残念ながら真に物を大切に愛する強さがない。譲らぬ執念をもつことがない、強い自己を持つことがない。漂う浮標のように流れに身をまかせる行き方である。自分に直接に関係ないことにはことにそれで、冷淡で無関心である。(神奈川新聞連載 随筆「ちいさい隅」昭和39年8月11日)

上記は大佛次郎の『怒る権利』という随筆文である。この随筆文の重要な点は2つある。一つ目は、権利の問題である。この頃は「景観権」のような権利は確立されておらず、本文の通り、「個人なり会社の財産」は「どう処置しても許される」に近い状況であった。それでは生活環境が破壊されてしまうので、神奈川県風致地区規則によって風致地区が指定されていたが、これは当時から「ザル法」³と呼ばれており、宅地造成・建設を防ぐことはできなかった。また、もう一つは(日本)人の直接関係ないことへの無関心さであろうか。大佛次郎や鎌倉の自然を愛する者に

³ 「鎌倉市民」1965年10月

とっては「鎌倉の自然破壊」は重要な問題である一方で、鎌倉という土地に興味がない人にとっては自然破壊は重要な問題ではない。土地を有効活用することが利益に繋がるため、自然は伐採し、建築物、特に建蔽率・容積率の高い高層建築を建てようとする、と主張しているのである。

上記のことを裏付けることとして、釈迦堂谷の宅地造成事例を取り上げる。釈迦堂谷は宝戒寺の二代目住職であった普川国師の入定窟(生きたまま入ってミイラになったと伝えられるやぐら)があるとされ、その他も貴重な文化財を豊富に含んでいる地区であるとされる。開発を行うにも許可申請が必要な場所であった。しかし、昭和 39 年 10 月に許可が出され、開発が行われてしまった。当時は御谷騒動も終結しつつある時期で、市が計画していた『財団法人鎌倉風致保存会』(鎌倉の風致を宅地造成などから守る。主眼は①国に対しても風致保存条例の立法化運動②保存すべき風致の地域・物件の認定③私有地に対して買収または借り入れての保護・維持管理。⇒風致史跡保存の理解と協力を求め⇒一般の寄付を募るとともに、国・県・市で3億1億1億ずつの補助金を集める)が結成される1ヶ月前のことであった。この時期に宅造が行われてしまった理由・問題点を『鎌倉市民』は以下のよう

に分析している。

それは個々だけの問題でなくほかにもあつたとおもわれるが、ここは八幡宮裏山の場合と違って、市民の反対がなかったから、であろう。ということは、八幡宮裏山の場合すら、市長ははじめ「宅造支障なし」と県に答申したのは附近の数人の同意書があったからで、後で「支障あり」と改めたのは市民の反対陳情があったからだ、市長自ら言明したことで明らかなように、市当局自体には風致保存に関しては何ら積極方針も策もない—したがって市民の反対がなければ「支障あり」という答申はできないことになっているということである。

以上のように『鎌倉市民』は分析しており、法規の不備と行政の欠陥だけを主張するのではなく、自主的な市民運動展開の必要を訴えている。上記のような事例があったからこそ、鎌倉では行政の保存・保全計画に頼るのみならず、市民が声を上げて生活環境の改善・自然環境の保護を行う風土が育まれたと推測される。

2 章 北鎌倉の詳細

2-1 データ/都市計画から見た北鎌倉



(図 2-1 大船地域づくり会議 HP より⁴)

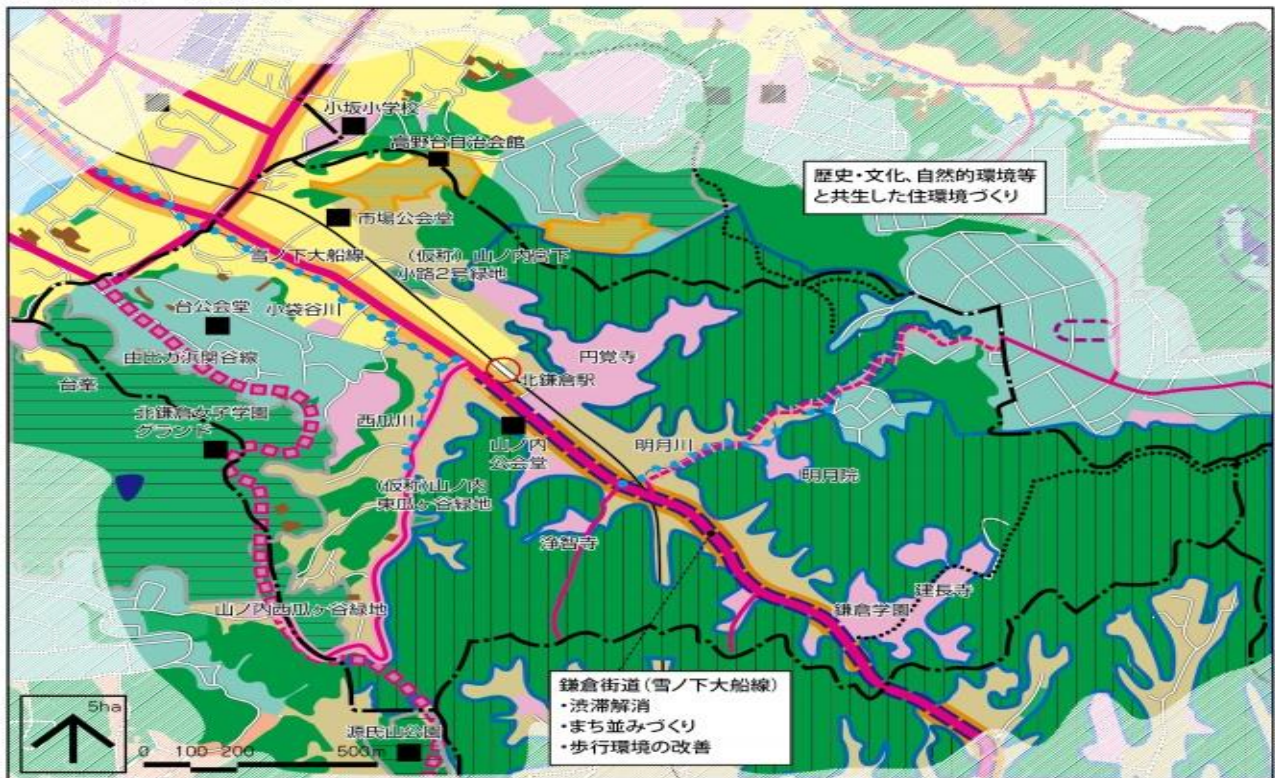


(図 2-2 大船地域づくり会議 HP より)

図 2-1 は鎌倉市の地域区分である。鎌倉市は鎌倉・大船・腰越・深沢・玉縄の5区分に分けることができる。図 2-2 は大船地域内の字別区分である。このうち大船周辺を大船市街地域、高野・今泉・今泉台周辺を大船丘陵地域、山ノ内・台周辺を北鎌倉地域と呼ぶ。

⁴ <http://o-f-n.jp/about/09oofuna1/index.htm>

図 地域別方針……北鎌倉地域



(図 2-3 鎌倉市都市マスタープラン 地域別方針 北鎌倉地域より⁵⁾)

図 2-3 は後述する鎌倉市都市マスタープランによる地域別方針である。北鎌倉地域は主に山ノ内中心部の門前町・商業区域、円覚寺・建長寺等の寺社とその背後にある自然景観を合わせた歴史的風土、台地区の住宅街で構成されている。

2-1-1 山ノ内地区の概要



(図 2-4 Google Map より筆者作成)

⁵⁾ <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/plan/documents/4-8kitakama.pdf>

神奈川県鎌倉市山ノ内は、大船地域の南東に位置している。西北には大船市街地域があり、北東で大船丘陵地域と接し、南東では旧鎌倉と接している。道路の中心は地域の北西(大船市街方面)から南東(旧鎌倉方面)にかけて貫いている神奈川県道21号横浜鎌倉線(通称:鎌倉街道)であり、その道から円覚寺・台峰(南西)・明月院、今泉台(北東)などに通じる路地が延びている。また、JR 横須賀線の北鎌倉駅が所在している。

地域的にはかなり広いが、半分近くの敷地を建長寺・円覚寺・浄智寺・東慶寺・明月院をはじめとする禅宗寺院が占有している。そのためこの地域は、鎌倉街道の東側にある円覚寺・明月院・建長寺、鎌倉街道の西側にある東慶寺・浄智寺の禅宗寺院地域と、鎌倉街道・それから伸びる路地の住宅街・商店街＝旧門前町地域に分けることができる。また、南東部は鶴岡八幡宮が所在する雪ノ下地区、南部は源氏山公園が所在する扇ガ谷地区、西部は台地区、北西部は小袋谷・高野地区、北東部は「昭和の鎌倉攻め」で作られた新興住宅街である今泉台地区に接している。住宅地としては、町ごとに町内会があり、建長寺付近の山ノ内上町町内会、円覚寺・東慶寺・浄智寺付近の山ノ内中町(北・南の2町内会)、北鎌倉駅付近の山ノ内下町(上・中・下の3町内会)、明月院から今泉台にかけての山ノ内明月会町内会、地区の南西部にかけて広がる山ノ内瓜ヶ谷町内会の合計8町内会が存在する。

山ノ内の特徴のひとつとして、鎌倉街道沿いにある商店街がある。古老の話では「山ノ内全体としては通り筋では職人が多く、「下町から台にかけては商いの家が多い」(鎌倉市教育委員会編 1971 p.195)とされるが、実際に北鎌倉駅の西側は歴史的な家業的商店街のたたずまいが残っており、一方で東側は建長寺・円覚寺の付近で観光客を主に対象とするような商業施設が増加している。これらは行政によれば、北鎌倉駅西側の「住商複合地」と北鎌倉駅東側の「観光型住商複合地」とされている。



(写真 2-1 北鎌倉駅西側 筆者撮影)

(写真 2-2 北鎌倉駅東側 筆者撮影)

北鎌倉駅西側の「住商複合地」の商店街について詳しく見て行きたい。この地区には60店舗ほどの商店があり、その多くが「北鎌倉商栄会」という商店街組織に加盟している。下記が北鎌倉商栄会加盟店の一覧である。この加盟店一覧からは3点ほど特徴を挙げることができる

1点目はチェーン店が少なく、家業的な商店が多い点である。チェーン店はコンビニエンスストアであるスリーエフ・ファミリーマートや豊島屋北鎌倉駅前店(鳩サブレが有名な鎌倉の地元和菓子屋である)など数えるほどしかない。コンビニエンスストアがある一方で、肉屋や八百屋も営業を続けており、共存しているのが特徴であるとも言える。

2点目は日常型の店舗が多い点である。スーパーマーケットがない代わりに肉屋・八百屋・万屋・豆腐屋・コーヒーショップ等があり、理容室・美容院・電気屋・薬局・医者・クリーニング・喫茶など一通りがそろっており、普段使いの買い物をこの街で完結させることも可能である。

3点目は門前町の面影を残す商店が現存していることである。たとえば神武堂表具店は主に掛軸、額装、屏風、

フスマの製作と修復を行っており、円覚寺・建長寺をはじめとする社寺の掛け軸の修復も行っている。また、植木屋、石屋、鍛冶工房・人形工房・織物工房を家業として行っている商店もあり、これらはみな江戸・明治期から代々続く歴史的な商店である。

また、下の表は鎌倉市商工会議所によって行われた鎌倉市商店街実態調査報告書の調査結果である。「大型店との共存共栄策」「年齢」「現在地での営業年数」に関しては比較用として大船駅の駅前の商店街である大船商栄会のデータも載せている。

固定客割合	90%以上	70~90%	50~70%	30~50%	10~30%	10%未満	無回答	平均値
北鎌倉商栄会	31.1	23	11.5	14.8	13.1	4.9	1.6	64.7

(表 2-1 鎌倉市商店街実態調査報告書第 12 回より筆者作成)

大型店との共存共栄策	積極的に 具体化	困難だが考 えるべき	一部について は考えられる	共存共栄策は 考えられない	無回答
北鎌倉商栄会	8.2	11.5	24.6	54.1	1.6
大船商栄会	30.1	28.9	24.1	16.9	

(表 2-2 鎌倉市商店街実態調査報告書第 12 回より筆者作成)

年齢	~29 才	30~39 才	40~49 才	50~59 才	60 才以上	無回答	平均値
北鎌倉商栄会		3.3	14.8	34.4	44.3	3.3	59.9
大船商栄会	2.4	13.3	32.5	24.1	21.7	6	50.2

(表 2-3 鎌倉市商店街実態調査報告書第 12 回より筆者作成)

現在地での営業年数	3 年未満	3~5 年未満	5~10 年未満	10~20 年未満	20~30 年未満	30 年以上
北鎌倉商栄会	6.6	3.3		13.1	8.2	68.9
大船商栄会	2.4	2.4	20.5	39.8	16.9	16.9

(表 2-4 鎌倉市商店街実態調査報告書第 12 回より筆者作成)

「固定客割合」の表からは固定客の割合が64.7%と高く、北鎌倉商栄会は北鎌倉に住む地元の人が多く利用していると類推できる。また、「大型店との共存共栄策」からは、イトーヨーカドーやルミネなどの大型店が近隣にある大船商栄会は80%以上の店舗が大型店との共存共栄策について考えており、30%以上の店舗がそれを積極的に具体化している。一方で大型店が近隣に存在しない北鎌倉商栄会は「共存共栄策は考えられない」という意見が多数を占めている。また「年齢」は北鎌倉商栄会の方が平均年齢が高く、「現在地での営業年数」に関しては30年以上営業している店舗が17%程度の大船商栄会と比べ、北鎌倉商栄会は 68.9%と大半を占めている。高度経済成長期の時代から営業している地元資本の店が多数である、ことなどが読み取れる。鎌倉の「住商複合地」「観光型住商複合地」というと大船駅周辺の商店街や鎌倉駅から鶴岡八幡宮方面に伸びる小町通り商店街のような華やかな商店街が思い浮かぶが、北鎌倉の商店街はそれらの商店街より規模が小さい。また、チェーン店系統が多い大船・鎌倉駅近辺の商店街と比べると、家業的形態の商店街が多く、かつての門前町の商店街の形態を現代に残しているといえよう。



(写真 2-3 大船東口商店街⁶⁾)

(写真 2-4 鎌倉小町通り商店街 筆者撮影)

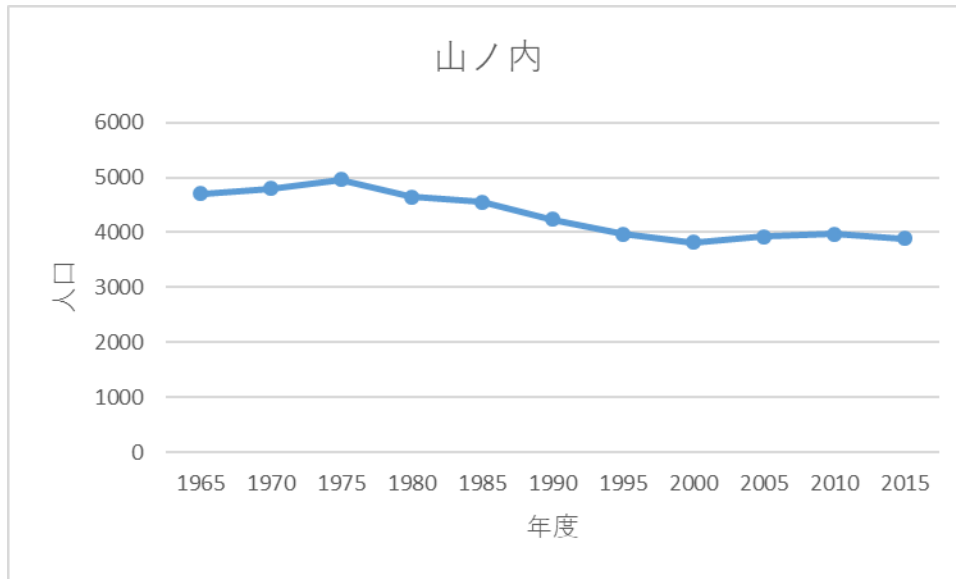
一方で、北鎌倉の商店街は日本の大多数の商店街と同様に衰退し始めている。商店街が廃れ始めたのは隣地区に大型スーパーができたことがきっかけである。1971年には鎌倉中心街に鎌倉とうきゅうが完成し、その後大船に西友・イトヨーカドーが開業する。商店街は高級品需要をとうきゅうに、日用品需要を西友・イトヨーカドーに奪われ衰退したようである。人手・後継ぎ問題も深刻である。戦後すぐは家業的商店街には地方から上京してきた若者が「丁稚奉公」のような形で働き、数年して独立するというスタイルが残っていたそうだが、高度経済成長期以降にはサラリーマンが増加し、商店街は人手不足に陥った。また、地元の顔見知り相手に商売を行う小規模店舗が多いため、後継ぎ候補がサラリーマンとして独立するケースが多く、後継ぎ問題が現状の最大の課題となっている。

次に、地域内にある JR 横須賀線の北鎌倉駅について確認する。北鎌倉駅の2015年の1日平均乗車人員を見ると、定期外利用者が3310人、定期券利用者が5684人、合計8994人となっている。円覚寺・建長寺の最寄り駅であるため観光客が多く訪れる駅ではあるが、通勤通学で駅を利用する人も多いといえる。実際、隣駅で観光客が多く訪れる鎌倉駅は定期外利用者が24543人、定期券利用者が19833人、合計44376人と定期外利用者＝来街目的で駅を訪れる人の方が多い。これは北鎌倉駅周辺に北鎌倉女子学園、鎌倉学園、神奈川県立大船高校があり、学生が多数利用していることが大きいと考えられる。また、東京側の隣駅である大船駅の1日平均乗車人員は98803人、横須賀側の隣駅である鎌倉駅は前述のとおり44376人であるが、それに比べて北鎌倉駅の乗車人員は一ケタ少ない。駅前商店街の規模と同様に、大船市街地域(大船駅)・旧鎌倉(鎌倉駅)と比べて規模の小さい駅であるといえよう。

次に、人口を確認してみたい。1950～60年代の山ノ内は空き地が目立ったとされ、その後数十年かけて小規模な宅地造成が行われてきたとされる。その影響があったのか、1975年までは人口増加が続き、ピーク時には5000人近くが居住していた。一方で1960～70年代に旧鎌倉や大船市街地域にスーパーマーケットや高級小売店が完成すると、比較的「不便」な地域である山ノ内は人口減少に転じることとなる。しかし21世紀に入り人口減少は止まり現在に至っている。2015年の山ノ内地区の居住者は3883人である。このうち、年少人口(0～14歳)が10.1%、生産年齢人口(15～64歳)が56.4%、老年人口(65歳以上)が33.4%である。全国平均はそれぞれ12.7%、60.6%、26.7%であるので、少子化・高齢化ともに進んでいるといえる。特に高齢化が著しい。また、山ノ内地区を歩くと明らかに敷地の細分化が行われた跡が見受けられる。高齢化が進み人口減少ペースは速くなっているものの、細分化された敷地に新規住民が住み始めた結果、新規流入人口が増加し結果として人口減少が押しとどめられていると考えられる。山ノ内は伝統的に「土地が出ない」＝人口流入が少ない土地として知られているが、ここ数1

⁶ <http://komekami.sakura.ne.jp/archives/3467/olympus-digital-camera-578>

0年で新規マンションの建設や敷地の細分化が行われ新規住民も流入している。



(グラフ 2-1 山ノ内地区人口推移 鎌倉の統計(各年度)より筆者作成)

2-1-2 台地区の概要



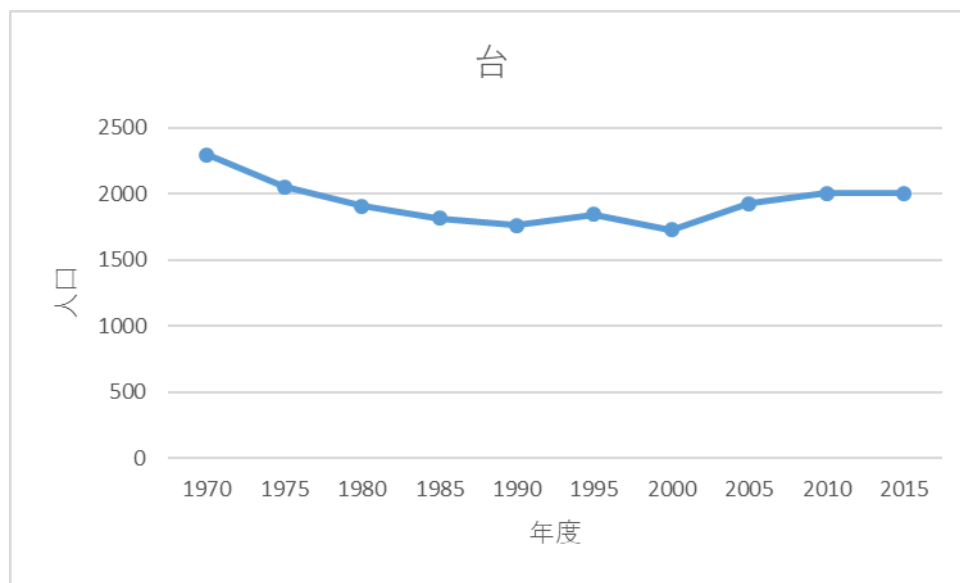
(図 2-5 Google Map より筆者作成)

次に、台地区について取り上げる。神奈川県鎌倉市台は現行行政地名として台一丁目から五丁目及び大字台があり、台一丁目は玉縄地域、それ以外が大船地域に分類されている。大船地域でも台二丁目がかもとも大船市街地域寄り、大字台がかもとも北鎌倉地域寄りである。また、次章で詳しく取り扱う都市マスタープランにおいては、山ノ内および大字台が北鎌倉地域として扱われている。そのため、以下大字台を「台地区」と表記する。

台地区は北鎌倉地域の北西部に位置し、西部は山崎地区、南東部は山ノ内地区と接している。また、南西部には北鎌倉に残る「里山」である台峰緑地が広がっている。台山丘陵の一部を占める北鎌倉女子学園の発掘調査では弥生時代から古墳時代の住居跡や土器、鉄製の釜が出土している。昔から人びとは敵からの襲撃があった

場合や洪水などの天災に備えて都合がいいように、正面に河川や海を持ち、背後に山や丘陵がある場所を選んで居住しており、そうした場所に「岱」の字を充てていた。それが「台」の文字に転訛したとされ、現在の地名に至ったようだ。地域内は主に鎌倉街道から北側の住宅街地区である市場地区、鎌倉街道の南側で台峰緑地に至る台地上にある台山地区に分かれている。市場地区は山ノ内下町と接しており、山ノ内の門前町・商店街と関係が深い。「山ノ内全体としては通り筋では職人が多く」「下町から市場にかけては商いの家が多い」（鎌倉市教育委員会編 1971 p.195）とされており、昔から商いの家が多く発展していたことがうかがえる。また、『鎌倉志』では「村の出口には道二条あり。北戸塚道、西玉縄道」と書かれており、交通の分岐点・交通の要衝であった。台山はかつて横須賀海軍士官の住宅街があり、第一航空艦隊司令長官等を歴任し、最後はサイパン島で自決した南雲忠一海軍大将の自宅もあった地域である。その一方で同時期に畑や田んぼなど農村地区も残っており、当時は背後にある台峰緑地で薪炭用の木を伐採したり、野兎を猟銃でしとめるといった、里山を使う風習が残されていた。「昭和の鎌倉攻め」以降、また近年にも急速に宅地化が進み、現在は閑静な住宅街となっている。

下記は台地区の人口推移である。台地区も山ノ内地区と同様に2000年頃までは人口減少が続いていた。しかし、近年はマンションが増加し、人口が大幅に増加している。特に地域内の一部が歴史的風土保存地区・風致地区・景観地区（詳細は後述）に指定されている山ノ内地区と違い、台地区に規制はかかかっていないため開発が進んでいる。平成20年の台地区の年少人口（0～14歳）が11.9%、生産年齢人口（15～64歳）が63.1%、老年人口（65歳以上）が25%であったが、平成27年の台地区はそれぞれ12.7%、59.9%、27.3%となり、生産年齢人口は減少しているものの、年少人口・老年人口は増加している。平成20年次のボリューム層のひとつである50代後半の人口が老年となり、それとともにマンションの新規開発によりファミリー世帯の居住者が増えたことにより年少人口が増加したと考えられる。



(グラフ 2-2 台地区人口推移 鎌倉の統計(各年度)より筆者作成)

2-1-3 都市計画からみた鎌倉/北鎌倉

次に、都市計画の視点から北鎌倉を概観する。

(i) 都市マスタープラン

鎌倉市の都市計画の指針となり、「長期的視点にたった都市の将来像を明確にし、その実現にむけての大きな道筋を明らかにするもの」として鎌倉市都市マスタープランがある。

鎌倉市の総合計画の基本構想には「古都としての風格を保ちながら、生きる喜びと新しい魅力を創造するまち」

であると謳われており、鎌倉市都市マスタープランでは以下の6つの目標が掲げられている。

★鎌倉市都市マスタープラン

- (1)緑や地形をいかした古都にふさわしいまち並みのある都市(みどりとまちなみ)
- (2)環境負荷の少ない都市(かんきょう)
- (3)人と環境にやさしい交通の都市(いどう)
- (4)安心して住み続けられる都市(くらし)
- (5)鎌倉ならではの多様な産業が根づく都市(なりわい)
- (6)皆が共に憩い愉しむ都市(たのしみ)

また、鎌倉市都市マスタープランでは緑により分節化された市街地の広がりや日常生活上の交流範囲を考慮して、市域を11地域に分け、それぞれの地域ごとの整備方針を示されており、そのうちの一つに、山ノ内、台が含まれる北鎌倉地域がある。北鎌倉地域ではまちづくりの基本的な考え方として①まち並みに、古都らしさをいかし、住民が誇りを持てる街をつくる。②歴史的風土と緑に囲まれた地域として、後世に継承する責任を背負いつつ、生活の場として暮らしやすいまちを目指す。③国際観光都市鎌倉の入り口として、観光客と住民が共に生きるまち、安心して歩けるまちを目指す。の3点が掲げられている。そのうえで「古都としてのまち並みの保全・創造と住みやすい環境づくり」「台峯の緑や河川などの自然環境の保全と活用」「生活と環境を支える交通環境づくり」の3点が目標とされている。

上記の3点を達成するため、それぞれに方針と実際の取り組み例が記されている。「古都としてのまち並みの保全・創造」のためには①連続性をもったまち並みづくり②歴史的遺産の保全と質の高い情報提供③住宅地の良好な環境保全、安全で住みやすいまちづくり、が方針とされそのために「歴史的都市にふさわしい沿道景観の形成(景観地区などの景観のルールづくり)」「歴史的遺産の保全・活用、北鎌倉の歴史的遺産の再認識・啓発と保全」「良好な住環境の保全、歴史・文化・自然環境等と調和した住環境づくり」等が取り組みとして挙げられている。

「台峯の緑や河川などの自然環境の保全と活用」のためには①台峯をはじめ、周囲に残された山林の緑を保全していく②河川環境の向上や多様な水資源の活用など、適正な水環境の維持向上を統合的に進める③自然に親しむ場を作る、が方針とされ、そのために「古都保存法による緑の保全、自然的な公園としての緑の保全・活用」「明月川・西瓜川・小袋谷川などの河川の自然回復と環境保全・親水化」「自然観察路・親水空間・ハイキングコースの整備」等が取り組みとして挙げられている。

「生活と環境を支える交通環境づくり」のためには①古都の環境と市民生活を守るため自動車利用を抑制する交通需要マネジメント施策を検討・実施すると共に、周辺環境との調和に配慮して、道路の改善や必要な施設整備を進める②高齢者や障害者など誰もが便利に安心して移動できる交通環境を整備する③瓜が谷、明月院道路は生活道路として、安全で緑豊かな道づくりを進める④住宅地内の道路を、誰もが安全で気持ちよく歩けるようにしていく、が方針とされ、そのために「鎌倉街道での交通需要マネジメント施策の検討・実施」「加安倉街道で沿道建物の壁面後退や都市計画道路の幅員の見直しなどにより高齢者や障害者にも歩きやすい道づくり、歩道づくりを推進」「幅員の狭い道路の整備・地域内ルールの検討」等が取り組みとして挙げられている。

(ii)景観地区

北鎌倉山ノ内地区の一部では鎌倉市により景観地区指定がなされている。山ノ内地区の中心部分を「風致景観の保全と創造」を実現するため、建築物の外観、形態意匠、敷き際は、歴史的風土と調和した均整の取れたものとする。特に、建築物の規模・形態等は地区別事項に適合し、かつ周辺景観との調和に十分な配慮をするものとする。」と定め、北鎌倉駅西側の「住商複合地」と北鎌倉駅東側の「観光型住商複合地」に分けて地区別事項を指定している。形態意匠についても基準が示されており、前者は商店街固有の歴史性や地域性、業態との

調和などにより、適度な賑わいとゆとりの演出に努めるものとされ、後者は背景となる山並み等の自然環境と寺社や古い建築物等の連なりが醸し出すまち並みとの調和に努めるもの、とされている。また、両者ともに建築物の色彩や高さの制限がなされており、高層建築や突飛な色の建築を建てられないような規制がなされている。

(iii) 古都保存法

前項の「背景となる山並み等の自然環境と寺社や古い建築物等の連なりが醸し出すまち並み」とは古都保存法のいうところの「歴史的風土」であり、古都保存法は北鎌倉地区にも適用されている。古都保存法(古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法)は前述の通り御谷騒動を受けてのもので、昭和41年1月に成立している。同法を受けて、歴史的意義を有する建造物や遺跡のいくつかを核として、その周辺地区の自然を保護するという観点から、昭和41年12月に朝比奈、八幡宮、大町材木座、長谷極楽寺、山ノ内の5地区に日本で最初となる歴史的風土保存区域が指定された。(695ha)その後、昭和42年3月に歴史的風土特別保存地区(歴史的風土保存区域の中で、歴史的風土の保存上枢要な部分を構成している地区、すなわち、歴史上価値ある文化的資産と、その周辺の自然的環境とが一体となった現状保存措置が必要な地区)として建長寺・浄智寺・八幡宮特別保存地区、円覚寺地区、永福寺跡特別保存地区など10地区226.5haが指定された。さらに昭和48年、昭和60年に歴史的風土保存地区指定追加、昭和50年に瑞泉寺地区などが風土保存地区から風土特別保存地区に格上げされるなど、現在は歴史的風土保存区域が朝比奈、八幡宮、大町材木座、長谷極楽寺、山ノ内の5地区989ha、歴史的風土特別保存区域が朝比奈切通し(朝比奈地区)、瑞泉寺・浄明寺・護良親王墓・建長寺・浄智寺・八幡宮・永福寺跡・寿福寺(以上八幡宮地区)、妙本寺・衣張山・名越切通し(以上大町材木座地区)、大仏・長谷観音・極楽寺・稲村ヶ崎(以上長谷・極楽寺地区)、円覚寺(山ノ内地区)の合計573.6haとなっている。また、歴史的風土保存地区では各市の歴史的風土保存計画によって、保存の主体や保存の重点項目が定められている。下記の図の通り、鎌倉市での保存の主体は山丘・谷戸の自然景観、谷戸を取り囲む静寂な自然的環境の保存となっている。保存の重点項目に関しては、各地区ともに建築物その他工作物の新築等の規制、木材の伐採規制、土地形質の変更に関する規制等が挙げられているが、本論で触れている山ノ内地区では「森林美について樹木の維持」があげられていることが特徴となっている。

2-2 落ち着いた街

北鎌倉に居住する人びとにお話をうかがい、「北鎌倉」の良さは何か？と質問すると、決まって「落ち着いた街である」「自然・緑に囲まれた街」である、という答えが返ってくる。この北鎌倉のもつイメージを解析していきたい。

北鎌倉のイメージの一つとしてよく挙げられるのが、本節で記述する「落ち着いた街」である。というイメージである。「街」が落ち着いた、というだけでなく、「人」が落ち着いた、おだやかである、という人も少なくない。この街に対するイメージがどこから来たのかを検証していく。

2-2-1 門前町として

北鎌倉、特に山ノ内は門前町であり「匠の町」でもある。「匠」にとって円覚寺・建長寺をはじめとする寺社仏閣は「スポンサー」であり、円覚寺・建長寺にとっても匠の持つ技術は貴重であり、相互依存的な関係であった。また、門前商店街も普段使いの店が多く、多くの商店が固定客を抱えていた。わざわざ他都市に出る必要もなく、お互い顔見知りの関係であることが少なくなかった。1-2-1にて、寺社・地元住民による経済活動が江戸時代から盛んであったと書いたが、その関係は昭和期まで続いていたといえる。また、昭和期には海軍士官や著名な文士、裕福なサラリーマンが近隣に居住していたこともあり、北鎌倉地区の文化レベルは高かったといわれている。昭和のはじめまでは無名の芸術家をスポンサーするという風習が残っていたといわれ、著名な芸術家である北大路魯山人も無名時代に山ノ内の炭屋や米屋のスポンサーを受けていたと伝わる。「地域コミュニティ」が非常に強固であり、かつ無名芸術家を支援するような文化レベルの高さ・裕福さを備えていたと考えられる。

2-2-2 現代に残る門前町・商店街

かつての門前町としてのあり方は、現代にまで残っている。現代でも山ノ内地区ではお祭りが盛んであり、特に7月の八雲神社の例大祭は多くの人々が参加する。山ノ内の八雲神社は、鎌倉時代に疫病が流行した際に、村人が安穏を祈願したのが始まりとされ、その後関東管領の山内上杉憲房が京都の祇園大神（現在の八坂神社）を勧請したと伝えられている。八雲神社の例大祭は神輿を担ぎ練り歩きながら北鎌倉駅前で山崎八雲神社（北野神社）の神輿と合流し町内を練り歩く「行合祭」という行事である。このお祭りの特徴は、お神輿が北鎌倉駅へ向かう前に、円覚寺・明月院・建長寺・円応寺・浄智寺・東慶寺の山ノ内各寺院を表敬巡幸する点である。お神輿は巡幸するたびに管長・住職・役僧の読教並びに参拝を受ける。もともと八雲神社の祭神は牛頭天王という祇園精舎の守護神で、スサノオと習合した神ではあるが、ここまで神仏混淆の祭礼は珍しい。同じ門前町である浅草の三社祭も江戸時代の末までは浅草寺と浅草神社が合同で行う“神仏混交”の祭礼として執り行われていたが、明治元年（1868年）、富国強兵を掲げる明治政府は、神道を国の宗教として位置付け「神仏分離令」を出し、寺と神社を分離したため浅草神社が単独で執り行うようになったという歴史があり、山ノ内の八雲大社例大祭とも類似点が見られる。

また、朝早くから托鉢を行う雲水（修行僧）の姿も特徴的である。個人で寺院の門前や往来の激しい交差点など公道で直立する「辻立ち」という形式の托鉢ではなく、集団で自派の檀家の家々を訪問する「門付け」という形式の托鉢を行っている雲水も多い。托鉢は禅宗ではとくに重要な修行とされているため、円覚寺・建長寺をはじめとした禅宗寺院を抱える山ノ内ではおなじみの光景である。

商店街のあり方も、門前町として、江戸・明治以来の面影を残している。商店を訪れる客の殆どは顔見知りであり、客は商店の主人との会話を楽しみながらショッピングをする。大船や鎌倉にある大型ショッピングセンターと北鎌倉の商店街の違いは、「個人サービスの充実」であるという。電車や自動車で数分の距離に大型ショッピングセンターがありながら、北鎌倉の商店街が現在も残っているのは、かつての「個人商店」的なサービスにも需要があるからであろう。

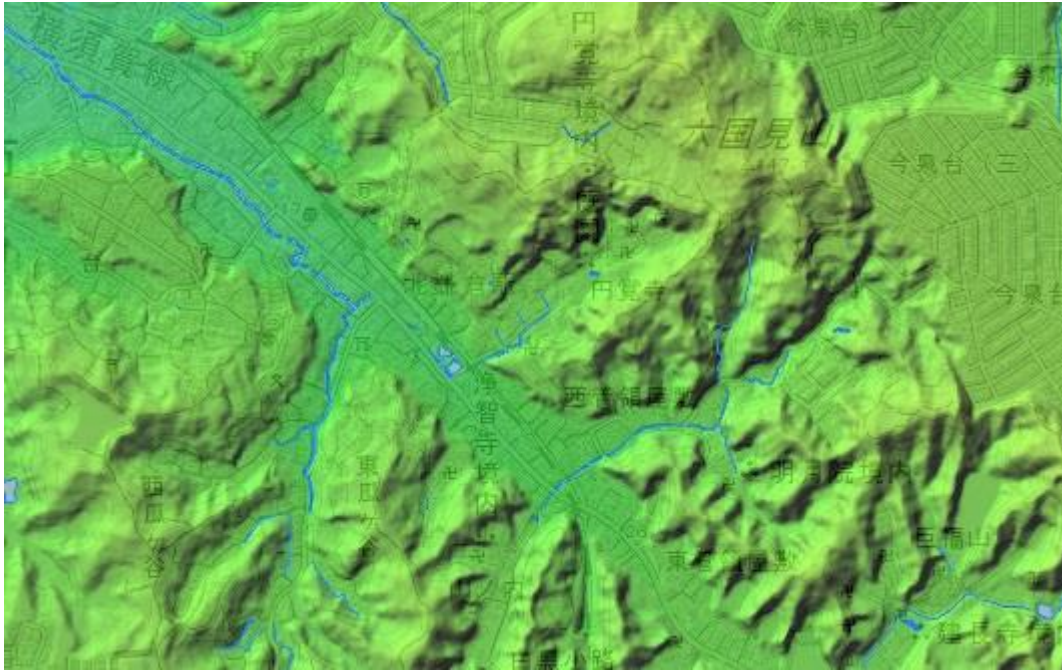
鎌倉時代に成立した「歴史的風土」たる寺社仏閣、江戸時代に成立した寺社仏閣を相手とする門前町、そして明治時代以降に新規流入したエリート層を相手に商売を行った商店街、そのいずれもが現代まで残っている。また鎌倉市による「歴史的風土」の歴史的風土特別保存地区への指定、商店街・門前町の景観地区への指定も影響し、高層建築のない落ち着いた町並みとなっている。また、門前町の名残を汲む山ノ内の人びとが寺・神社の行事に積極的に参加し伝統を引き継いでおり、商店街も同様にかつてのあり方を継続し、それを支持している地元住民も多いこと、近代的な商業施設や若者向きの娯楽施設がないことなど、一見不便にも思われるこの街のあり方が「落ち着いた街」というイメージを想起させる最大の要因となっている。

2-3 緑に囲まれた街

北鎌倉は緑に囲まれた街であるという。実際、台地区の南部は「台山」と呼ばれる丘陵であり、山ノ内地区も三方を山に囲まれているといっても過言ではない。また、山ノ内地区の住民の一部は現在も六国見山や台峯から流れてくる地下水を利用した井戸を用いている方も多く、自然に囲まれている意識を強く持っている。このイメージについて地理的・歴史的に詳しく検証していく。

2-3-1 地理的に見た北鎌倉

下記の図 2-6 は北鎌倉周辺の地図に色別標高図を重ねたものである。



(図 2-6 地理院地図より筆者作成⁷⁾)

図 2-6 からは円覚寺・明月院・東瓜ヶ谷と西瓜ヶ谷の間、また北東から南西へ抜ける鎌倉街道沿いの山ノ内門前町の区域が谷となっていることが読み取れる。ただし、山の中にある「谷」とは性格が異なり、盆地や平野の山の辺に位置する丘陵と丘陵の間の小さな谷であり、東日本では谷地・谷(やつ)、谷戸と呼ばれている地形である。谷戸は丘陵大地の雨水や湧水等の浸食による開析谷であるため、川や湧水をはじめとした水資源が豊富であり、日当たりもよいため高度の農耕土木技術が発達する戦国・近世以前までは最も居住・農耕に適した地であった。そのため、三方(両側、後背)に丘陵台地部、樹林地を抱え、湿地、湧水、水路、水田等の農耕地、ため池などを構成要素に形成される地形のことを「谷戸」と呼ぶこともある⁸。また、歴史的に谷戸は尾根部は畑地、斜面林は薪炭林や農用林、谷底部は水田として使われてきた。かつての台や山ノ内にも畑・水田があり薪炭林も伐採していた歴史がある。また、鎌倉では谷戸を前述の農地として利用だけでなく、禅宗寺院の所在地として利用され宗教的な景観が生み出されていることも特徴的である。



(写真 2-5 円覚寺の谷戸 筆者撮影)

鎌倉は俗に「六十六谷」と呼ばれ、多くの谷戸があることで有名であった。高橋睦、石川幹子らは GIS を用いて鎌倉の谷戸の抽出を行っている。それによれば、鎌倉には209個の小流域があるとされ、これをもとに谷戸の類型化を行っている。まず谷戸内の社寺の有無により社寺を持つ谷戸を抽出し、次に社寺を持たない谷戸のうち、山林・農地などの自然的土地利用が75%以上を占める小流域を自然環境の残る谷戸とし、残った住宅用地・工

⁷ <http://maps.gsi.go.jp/>

⁸ <http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/kkjs/yato/>

業用地など都市的土地利用を持つ小流域を宅地化された谷戸として分類分けした。最初の抽出では社寺を有する小流域は67つあることがわかった。ただし、谷戸を社寺空間が占有しているのは、円覚寺・建長寺・東慶寺の谷戸の3つのみであり、残りの64の小流域は、宅地化されている中に1つまたは複数の社寺が存在していることがわかった。また、次の抽出では自然環境の残る(土地利用が田畑、公園、自然緑地である小流域)谷戸を抽出したが、これは26つあることがわかった。この中には、次節で取り上げる台峰が含まれている。しかし、自然環境の残る谷戸は少なく、現在、鎌倉の大部分を宅地化された谷戸が占めていることもわかった。(円覚寺に見る古都鎌倉における宗教的谷戸空間の景観構造に関する研究)上記の研究からは鎌倉の中でも北鎌倉の持つ特殊性がいくつか想起できる。ひとつは谷戸を社寺空間が占有している＝谷戸というひとつの地形内が社寺というイメージで統一されている空間を持つ地区は円覚寺・建長寺・東慶寺という北鎌倉を代表する禅宗寺院のみであることである。鎌倉は京都や奈良と比べると歴史的な「まち並み」の集積が少ないことが特徴と1章で述べたが、こと円覚寺・建長寺・東慶寺の所在する谷戸に関して言えば、谷戸内に禅宗寺院の伽藍配置がなされ、周囲とは山で隔絶された奥行きのある宗教的な景観が生み出されている。これら「歴史的風土を構成する緑」が残る禅宗寺院を谷底から、もしくは尾根部や斜面から常に視覚的に認識できることが北鎌倉の大きな特徴である。もうひとつは、北鎌倉の南西側の後背地である台峰に自然環境の残る谷戸が存在していることである。江戸時代、北鎌倉の谷戸は宗教寺院が占有している部分、宗教寺院と門前町・門前商店街がある部分を除けば農村であった。この「農村」では谷戸は前述のように尾根部は畑地、斜面林は薪炭林や農用林、谷底部は水田として利用されていた。人々は農作物を作る農業に加えて林業を行っていた。特に斜面林は自然の木々が育ってできた「自然林」「原生林」とは違って、炭を作るために人の手が入った「雑木林」もしくはスギやヒノキを植林してできた「人工林」であり、これらを含んだ農村は「里山」と呼ばれる半自然地区であり、50年前くらいまではこのような地区が北鎌倉周辺の多くを占めていた。

2-3-2 山の形式

古くから、山は「使われる」ものであった。前節で北鎌倉の一部は農村であると記したが、北鎌倉に限らず、山の辺に住む人々は、山で木の実を採り、狩を行い、また山の木々を燃料や田畑の肥料として利用した。そうしてできた景観が「里山」の景観であり、童謡「ふるさと」に唄われている通り、かつての日本ではありふれたものであった。

一方で「使ってはならない山」も存在した。その代表例が「鎮守の森」である。「鎮守の森」は神社を囲むようにして存在する森林であり、森林や森林に覆われた土地、山岳(霊峰富士など)・巨石や海や河川(岩礁や滝など特徴的な場所)など自然そのものが信仰の対象になっている場合が多い。これは、寺の周りを囲っている社寺林も同様であり、古くからの植生が比較的残っているとされる。鎌倉においては御谷騒動の原因となった御谷の森がまさに鶴岡八幡宮の「鎮守の森」である。また、古都保存法における歴史的風土における建造物は鎌倉の場合寺社である場合が多いため、「鎮守の森」や「寺社林」の多くが歴史的風土特別保存区域、もしくは歴史的風土保存区域に指定されている。

また、使う山、使ってはならない山はあくまで利用の有無であったが、近代に入って山は審美的な評価をされるようになる。その変化を示す典型的な例が地理学者の志賀重昂の『日本風景論』(1894)である。この本は日本の国土の「美」を称揚するものであった。また、1919年には都市計画法において京都は東京や大阪と違って「日本ノ大公園」であり「風景美」を重視すべきと規定されるなど、自然風景・山並みの美しさの保存、という思想が出てきた

2-3-3 「歴史的風土」と「里山」

古都保存法の成立と歴史的風土特別保存区域・歴史的風土保存区域に指定されたことにより、御谷の森をはじめとする多くの「鎮守の森」や「寺社林」は保存されることとなった。北鎌倉においては円覚寺一体・建長寺一体・浄智寺一体をはじめとする寺社林である。一方で、「寺社林」でない自然が残る区域は歴史上意義を有する建造物、遺跡がないことから歴史的風土ではないとされ、保存の対象外となった。その代表例が北鎌倉・台地区の裏

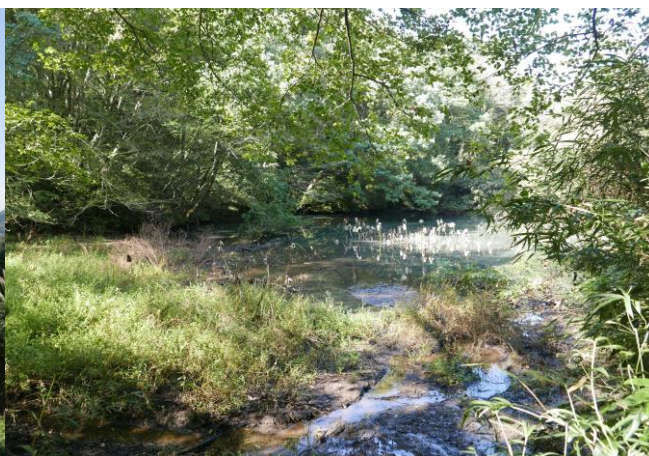
にある「里山」であった台峰緑地である。前項で述べたように、北鎌倉の自然を大きく二つに分けると、宗教寺院とその背後に広がる鎮守の森的な「歴史的風土を構成する緑」と、人々が利用してきた「里山」景観の二種類があることが推測される。「歴史的風土を構成する緑」は御谷騒動以来の「古都保存法」の政策に守られ一定の保存がなされてきたが、「里山」は近年に至るまで破壊され続けていた。

里山が破壊されてきた原因は、昭和30年代以降の燃料革命（木炭から石油、ガス、電気へのシフト）や、農業革命（有機肥料から化学肥料へのシフト）である。里山は、それまで近隣の住民に燃料や肥料の確保のために適切な下刈りや周期的な伐採が行われ、「利用」されてきた。しかし、北鎌倉では燃料革命・農業革命、また東京のベッドタウンとなったことでサラリーマンが増えたことで農家の数も少なくなり、手入れが放棄されてしまった。また、古都保存法が適用されない緑地での大規模開発計画がなされ、鎌倉の都市構造の上でも新たな課題となっていた。鎌倉市は、平成6年の都市緑地保全法（現都市緑地法）改正により、市町村が「緑の基本計画」を定めることができるようになったことから、平成8年に「鎌倉市緑の基本計画」を策定している。同計画では、「緑の機能」についてこれまで言われてきた「歴史的風土保存の機能」だけでなく、「生物多様性の確保の機能」「レクリエーション活動の場提供の機能」「都市景観形成の機能」「都市環境負荷調節の機能」「防災の機能」が言われるようになり、緑を保全する体制が整い始めた。「台峯（北鎌倉の南西）－巨福山（北鎌倉の南東）－今泉（北鎌倉の北西）にかけての丘陵の緑を保全」が言われるようになり、北鎌倉を囲う自然が全体的に保全される方針になった。また「鎌倉中央公園拡大区域（風致公園）、散在ガ池森林公園（風致公園）、山ノ内西瓜ヶ谷緑地（都市緑地）、（仮称）山崎・台峯緑地」等都市公園・緑地の整備が言われるようになったことや、「県道横浜鎌倉線沿いに形成された市街地（山ノ内・市場地区等）では、残された小規模な樹林や社寺の緑、公共施設の緑等を大切に、土地利用にあわせた緑化を行ってまち並みの緑の連続性を向上させ、暮らしを豊かにする緑の充実を図る」との記述があることも特徴であり、「鎮守の森」や「里山」としての機能だけでなく、「レクリエーション機能」や「都市景観形成の機能」についても言及されているのが特徴的である。また、「里山」の保全に関しては、多くの地元 NPO 団体がナショナルトラスト運動（自然を保護する地域を設定して買い上げ、次世代に伝えていくために管理・保全していく活動）や実際に緑地を保全する活動を行っている。「里山」は「自然林」でも「原生林」でもないため、古都保存法や伝統的建造物群保存地区で行われるような「凍結保存」では山が荒れてしまう。台峯が荒廃した原因も、地域の大部分が公有地や企業の所有となり、手入れされなくなったことが原因である。そのため、林床の下草刈り、危険木の伐採、枯木の伐採、密植した樹木の間伐、道普請、竹林の間伐、道筋の手入れ、山野草の保護、適性樹木の植林など、かつての里山でなされてきた保全活動をボランティアで行っている団体が存在することが特徴的であった。

以上のように、北鎌倉の自然は「歴史的風土」を構成する寺社の背後の「鎮守の森」的な自然景観と、かつての農村に付随されていた「里山」で構成されており、いずれも「昭和の鎌倉攻め」で危機に陥ったが、「鎮守の森」は古都保存法で保護されることで維持され、「里山」も地元の NPO 団体の努力等によって復活しようとしている。



（写真 2-6 台峯より山ノ内方面 筆者撮影）



（写真 2-7 台峯 谷戸の池 筆者撮影）

3 章 他都市との比較分析

3-1 鎌倉と京都の「外からの視点」

前章までが、鎌倉、特に北鎌倉についての歴史と概観である。本章では他都市との比較研究を行い、北鎌倉について社会的に分析を行ってみたい。

京都市と鎌倉市は古都保存法において、「わが国往時の政治、文化の中心等として歴史上重要な地位を有する市町村」である「古都」に指定されている。しかし、同じように「古都」に指定されている2都市でも内実は異なる。特に、明治時代まで天皇が居住し日本の中心都市のひとつであった京都と比べると、鎌倉は鎌倉幕府崩壊後さびれた寒村となって歴史的な影響力は薄まり、次に脚光を浴びるのは明治時代、保養地・別荘地等の「住宅地」としてであった。そのため、「歴史的な街並みづくり」に関しては他都市と比較すると大きく遅れをとっているといわれている。これについて鎌倉市景観部都市景観課の比留間彰氏は「古都とはいえ鎌倉には歴史的なまち並みの集積がなく、様々な時代や様式の建物が混在し、景観づくりの方向性を共有しにくい」「古都」「寺社」「海」「湘南」「住宅地」といった様々なイメージがあり、市民は「古都にふさわしい」「鎌倉らしい」という言葉をよく口にすが、それが市民間で共有されているわけではないことが大きな原因である、と分析している(自治体景観政策研究会 2009 p55 参照)。

では京都の「京都らしさ」とはなにか。京都市は人口147万人、日本の市で8番目の人口を有する大都市であり、市内総生産は名目で5兆を超えている。経済的には繊維産業のような「伝統産業」と電子部品や半導体製造等「ハイテク産業」が混在する産業都市である。一方で、「京都らしさ」を語る際には国宝211件、重要文化財1865件を抱える「観光都市」であり、「古都」であると語られることが多い。

野田浩資によれば、「京都らしさ」には二つの側面があるという。一つは、外から京都に対して「京都らしさ」を求める視点である。現実には多くの人口を抱える大都市であるにもかかわらず、京都には「日本文化の象徴」や「日本人の心のふるさと」としてのイメージが期待される。この「古都イメージ」が観光客に繋がり、京都の伝統的な景観を保全していこうという主張とも繋がっていく。もう一つの側面は内からのもので、そこに住む人々の生活の営みから生み出されるとされている。

まずは、京都の「外から京都に対して「京都らしさ」を求める視点」について言及してみたい。京都の景観問題は、市内中心部でのマンション建設によるトラブル、高層ビルによる景観破壊、周辺地域での乱開発による自然環境の破壊などにより社会問題化された。1960年代半ば、鎌倉の御谷騒動と同時期に、京都では「京都タワー建築問題」「名勝双ヶ岡の売却問題」「史跡御土居の破壊問題」が起こり「古都保存法」制定、そして京都市内の歴史的風土特別保存地区・歴史的風土保存地区の指定のきっかけとなった。さらには市街地景観条例、「伝統的建造物群保存地区」の指定、また京都市基本計画による方針等、国から、もしくは京都市から市内の地域開発に「制度」によって制限がかけられることになった。「京都らしさ」が公的に「制度」化されたといえよう(片桐新自編 2000 p51~65 参照)。

では、鎌倉においてはどうか。鎌倉市においても外から鎌倉に対して「鎌倉らしさ」を求める視点は存在する。「古都保存法」による「古都」指定、北鎌倉山ノ内地区における景観地区指定、都市マスタープランにおいての北鎌倉地区の目標(①まち並みに、古都らしさをいかし、住民が誇りを持てる街をつくる。②歴史的風土と緑に囲まれた地域として、後世に継承する責任を背負いつつ、生活の場として暮らしやすいまちを目指す。③国際観光都市鎌倉の入り口として、観光客と住民が共に生きるまち、安心して歩けるまちを目指す。)はそれであろう。また非在住者・観光客からも歴史・伝統・古風イメージを持つ個性的な街と思われている点は京都と同様である。

一方で、鎌倉の抱えている歴史遺産は京都と比べると圧倒的に少ない。下記の表の通り、国宝・国指定重要文化財・国登録有形文化財の数は、それぞれ鎌倉は京都の10分の1以下である。国宝(建造物)に至っては円覚寺舍利殿のみとなっている。また、京都の産寧坂地区や祇園新橋地区等は、文化財保護法により城下町、宿場町、門前町など全国各地に残る歴史的な集落・町並みの保存のため市により指定される伝統的建造物群保存地

	国宝	国宝(建造物)	重要文化財	登録有形文化財
鎌倉	15	1	167	18
京都	211	41	1865	356

(鎌倉市 HP⁹並びに京都市情報館¹⁰を参照に筆者作成)

区に指定されており、京都市内の全4地区が国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けている。一方で鎌倉は景観重要建造物(景観上重要な建築物・工作物を市長が指定し、その保全を図るもの。景観法による)が1件、景観重要建築物等(市内の近代和風・洋風建築物等の保存・活用を支援するもの。鎌倉市景観条例による)が32件あるものの、伝統的建造物群保存地区は定めておらず、重要伝統的建造物群保存地区の選定も受けていない。これは、鎌倉の「古都」としての歴史的町並みが鎌倉・室町時代以降にほとんど破壊されてしまったことを示している。

これは「鎌倉らしさ」がはっきりしない要因の一つにもなっている。京都の場合、保存・保全すべきとされているのは平安京遷都以降、または応仁の乱による荒廃以降脈々と受け継がれてきた歴史的風土であり、行政の面からみれば歴史的風土保存地区・伝統的建造物群保存地区、また様々な国宝・重要文化財・登録文化財であろう。一方で、鎌倉には京都のようなはっきりとした「古都イメージ」はない。歴史・伝統・古風イメージはあるものの、それは鶴岡八幡宮・円覚寺・建長寺のような一部の歴史的建造物がもたらすものであり、歴史的町並みは存在していない。また、鎌倉は近代以降の保養地・別荘地など「海」や「湘南」のイメージをも持たれている。歴史的風土保存地区として保存された山ノ内の円覚寺・建長寺地区など一部を除いて、明治以降保養地・別荘地としての開発が進んだ旧鎌倉ではまさに「歴史的なまち並みの集積がなく、様々な時代や様式の建物が混在し、景観づくりの方向性を共有しにくい」状況が現存してしまっている。

3-2 鎌倉と京都の「内からの視点」―北鎌倉と六角町を対象に―

外からの視線は同じ「古都」に指定されている京都市と鎌倉市では大きな違いがあった。次に、内からの、そこに住む人々の生活の営みから生み出される視点について言及していきたい。

まず京都についてである。京都では前述の、外からの視線で構成された「京都らしさ」が行政や観光客等多くの人々に議論されていた。この議論は内からの「京都らしさ」の問い直しに繋がっていったとされる。

京都では高層マンション・高層ビルのような「現代建築への規制」だけでなく町家など「伝統建築の保存と活用」への関心も高い。それは京都の伝統的景観が神社仏閣によってのみではなく、低層の木造日本瓦葺家屋による町家¹¹でできた町並みで構成されているからである。京都においては1980年代までは文化財級の「町家」の保存が取り込まれるのみで「町並み」への関心は広がってこなかったとされるが、1990年以後には町家を保存だけでなく活用する方向での議論がなされるようになり、NGO 型の活動も盛んになった。それにこたえる形で、京都市基本計画でも「町家」と「町並み」の保全が課題となっている。

この町家の保存と活用に関わっているのが、古くから京都の中心部の町家で生活している「町衆」と呼ばれる人々である。町衆には町衆たらんとする「張り」が求められているとされる。野田浩資は、京都の持つ魅力の源泉の一つを「不退転の決意と緊張」の中で担ってきた商家群、経済と祭礼の担い手である「町衆」の存在を、祇園祭の「山鉦町¹²」の一つである六角町について以下のように指摘している。

六角町においては、明治期以降、住民の入れ替わりが続いても、「町内」による自営の働きが、作用し

⁹ <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/treasury/documents/siteitiran.pdf>

¹⁰ <http://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/0000005958.html>

¹¹ 間口が狭く奥行き長い敷地に建てられた伝統的な建築様式による民家

¹² 祇園祭に使う山や鉦を保存・運営している町

続けていた。新規来住者は、「家業」の経営を主たる目的に転入してくるが、「居住」と「土地家屋の所有」だけが「町内」の成員資格獲得の条件とされるわけではない。転入者が土地と家屋を入手したとしても、「町内」はその人物を見極めようとし、一方で転入者は「町内」の規範にふさわしい行動をとるよう期待される。そこには、「町内」の自衛のメカニズムが「近代的私有権との間で揺れ動きながらも」ゆるやかに作用してきたのである。商業・家業的空間としての場所性と、祇園祭や儀礼の形式・作法などの文化性がそれを補強し、「六角町は、なおも祭りの格式が保たれ、町内の規制力が機能している」地域なのである。

野田は、このような形での暗黙の規制力が現在でも働いているとされ、そのことが「町家」をマンション等のビルに建て替えることに対するブレーキになってきた。また、それは「町衆」たちの不合理ともいえる「気概」に基づいたものであったと指摘している。また、「町衆」をめぐる議論では、京都ネイティブたる町衆と郊外に住む人々の間の「京都」認識が異なっていることも指摘されている。近代京都は市域を大幅に拡大しているため、旧来の京都である「上京」「下京」と言われる地区以外にも、山科や伏見など、独自の地域圏・文化圏を形成していた地域も含むようになった。さらに、近代京都は産業都市としての顔を持つ。その産業都市へ通勤通学するためのベッドタウン、郊外地域が形成された。一方で、「山鉾町」の一つである六角町は、「暗黙の規制力」や強烈な「地元」意識という名の下で、その地域社会に適合しないと思われる人々、建物を排除してきた。以上のように、京都では外から京都に対して「京都らしさ」を求める視点である観光客・国家・行政等の視点だけでなく、内から京都に対して「京都らしさ」を求める視点である、「町衆」からの視点があることにより「京都らしさ」≡歴史的環境≡「古都イメージ」を維持してきた。一方で、その「地元」意識は多くの人を「よそ者」として排除してきたのである(片桐新自編 2000 p65~70 参照)。

六角町は「内から京都に対して「京都らしさ」を求める視点」の代表的事例である。ここで、六角町を取り上げたのには二つの理由がある。一つは、六角町が京都市の中でも室町という都心地区に位置していることである。六角町が位置する室町は京呉服の集散地問屋の町として知られている。歴史的には、織物を扱う「職人の町」である西陣に対して、主にきものを商う「商人の町」として発達してきた「歴史的都心」地域である。また、現在においても京都の都心部に近く、本来なら開発圧力の強い場所である。また、「外からの視点」では歴史がある地区とみられているものの、国や京都市から歴史的風土保存地区・伝統的建造物群保存地区等に指定されているわけではない。景観法による地域景観づくり協議会¹³である明倫自治連合会、または六角町に居住する「町衆」の人々により地域の環境が保全されてきた地域である。二つ目は、前述の通り祇園祭を運営する「山鉾町」であり、祭りを通して地域のまとまりが生まれているという点である。この二つの点で山ノ内門前町地区、前者の点で台地区と類似点があると考えられる。

一点目について北鎌倉地区にて考えてみたい。北鎌倉山ノ内地区は前章の通り、三方を山に囲まれており、地域の多くを建長寺・円覚寺・浄智寺・東慶寺・明月院をはじめとする禅宗寺院とその背後にある自然、歴史的風土が占有している。その一方で、近代以降は東京のベッドタウンの側面も持ち、実際に北鎌倉を囲う六国見山裏の今泉台や高野台といった地区は宅地開発されていった。台地区も同様であり、大正時代の海軍士官の高級住宅街の建設に始まり、昭和からは住宅がスプロールしていった。この「昭和の鎌倉攻め」という宅地の「乱」開発は御谷騒動以来の住民運動により終止符を打ったわけであるが、この開発を止めさせた力は、六角町でいう「町衆」たちの不合理ともいえる「気概」に近い、「北鎌倉らしさ」=禅宗寺院とその門前町が残存することに起因する「落ち着いた街」と自然景観が残ることによる「自然に囲まれた街」を求める力であった。また、北鎌倉地区の多くの人々は無秩序な近代化に対抗する「北鎌倉らしさ」について不合理と感じていない面もある。大型ショッピングセンターが存在しないことにより夜間の買い物はしづらいが、それは夜間の静けさ、閑静な住宅街化を促進する。また、近代社会は敷地を有効活用するため建築を高層化する傾向にあるが、高層建築のない北鎌倉は住宅地の周りを取り囲む禅宗寺院と自然景観を常に仰ぐことができる。里山景観が残る台峯では台地区の子どもたちが自然と触れ合いながら遊んでいる。そこには近代化による価値観以外のそれを見ることができる。

¹³ 地域の方々が想いや方向性を共有し、さらには、新たにその地域で建築等をしようとされる方々と一緒になって地域の景観づくりを進めていくことを目的とした制度

また、六角町では、松坂屋が伝統的木造建築をそのまま残して京都事業所を置き、呉服仕入れ店舗として使用していることが有名である。松坂屋という大企業が伝統的木造建築をそのまま使用することは経営効率的には考えられない。しかし、松坂屋は1749年から現在地を使用している六角町の一員として、採算を度外視して、松坂屋というイメージを守るために経済的には非常に率の悪い伝統的木造建築を維持していると考えられる。北鎌倉には松坂屋のような大企業は存在しない。しかし、豊島屋のような鎌倉資本、または神武堂表具店をはじめとした門前町の名残を残す家業的商店街が低層の町並みを保ちながら存在している。伝統的町並みが残る六角町では低層の木造日本瓦葺家屋、伝統的町並みがほとんど残っていない北鎌倉山ノ内地区においては低層住宅、という違いはあるが、地元住民が低層の街並みを維持しようとしている面では共通したものが見られる。

次に、二点目について考えてみたい。六角町においては「(祇園)祭を滞りなく行う」という言葉は重要な意味を持つ。1994年には18戸の居室をもったワンルームマンションの建設計画が立てられたが、「町内が27戸でしかないところにいきなり18戸の、しかもファミリータイプではないワンルームのマンションが建てば、町内の運営に支障をきたしかねない。」との理由でワンルームマンションは建たないことになった。これは「景観」や「町並み保存」という観点だけでなく、六角町の町内運営を重視する、つまり町内運営の中心である祇園祭を管轄する「山鉾町」の「町衆」という意識が強いことを表している。京都はある意味で排他的な性質を持った都市であると語られるが、実際に六角町は排他的な性質を持つ「町内の規制力」を保持している。

一方で、北鎌倉には六角町のような「町内の規制力」は存在しない。山ノ内の町内会は転入者が来ると町内会への参加を促すが、管轄できるのはそこまでである。八雲神社の例大祭は、あくまで八雲神社の氏子と希望者が運営を担うものであり、参加を強制されるわけではない。円覚寺・建長寺にしても、たとえ寺の面前に引っ越したとしても氏子となる必要はない。地元の人びとが門前町・商店街を維持してきたとはいえ、新規住民が北鎌倉に土地を購入した場合は近代的土地所有権のもと、かつての門前町の風習に参加しない自由もあり、一見不便な商店街を利用せず、大船や鎌倉のショッピングセンターを利用してもいい。実際、転入してきた多くの人は雲水の伝統を知らないため、「托鉢」に戸惑っている人も多い。しかし、町として新規住民に働きかけることはない。比較的「土地が出ない」地域として知られてはいるが、近年は相続に伴う土地分割が原因で人口流入も進んでいる。このように、北鎌倉は歴史性を持ちながらも、「東京のベッドタウン」であるため、六角町のような特殊な排他的性質は持たない地域であるといえる。

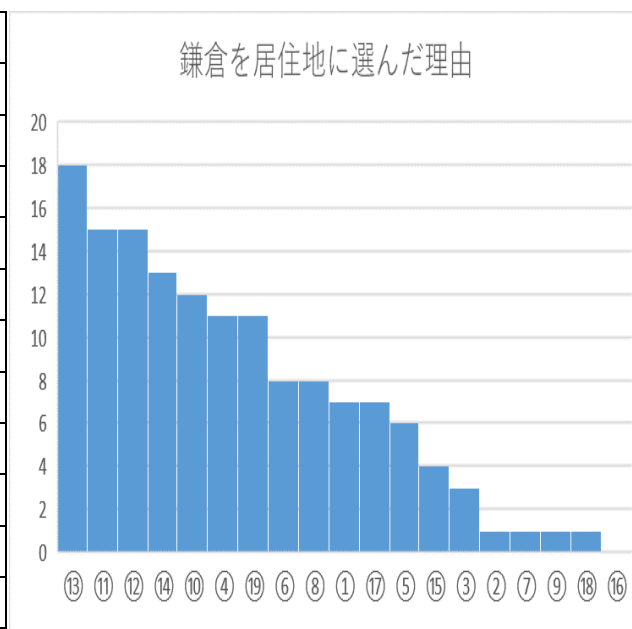
4章 北鎌倉地区についての考察

前項で、北鎌倉地区は六角町のように「町内の規制力」は存在しないにもかかわらず、「北鎌倉らしさ」＝禅宗寺院とその門前町が残存することに起因する「落ち着いた街」と自然景観が残ることによる「自然に囲まれた街」を求める力が働いていることを明らかにした。この力が働く理由を明らかにしてみたい。

一つは、北鎌倉地区の住民の「気概」である。北鎌倉地区は様々な開発の圧力に晒されてきたが、御谷騒動以来の住民運動により開発は下火となった。そののちも住民は「北鎌倉らしさ」を維持するための活動に積極的賛成(マンション開発への反対運動・祭りの企画からの参加・商店街の維持・ナショナルトラスト運動・里山の維持保全等)または消極的賛成(商店街の使用・里山保全団体への寄付、賛同表明・祭りへの参加等)を行ってきた。それによって、北鎌倉は歴史的風土だけでなく、それに付随した生活景が現存している。

もう一つは、転入者の存在である。北鎌倉は歴史的環境が残っているものの、六角町のような「町内の規制力」は存在しないため転入者も比較的入りやすい。しかし、ここで改めて北鎌倉の地理的特徴を考えてみたい。北鎌倉は都心から40km 圏に位置する東京のベッドタウンである。柏・船橋・川口・さいたま・所沢・立川のような都心から30km 圏以内に位置するベッドタウンと比べると距離的なハンディが大きい。また、他の40km 圏の都市と比べても家賃・地価が高い。そのため、北鎌倉に転入したいと考える人は、北鎌倉に対して通勤時間や家賃地代のデメリットを越えるメリットを感じているはずである。下記の図表は鎌倉市の実施した最新の転出入市民意識調査によるものである。

鎌倉を居住地に選んだ理由	実数(人)
①就職や転勤などの理由	7
②入学や進学などの理由	1
③学校など教育環境の理由	3
④住み替えなどの理由	11
⑤結婚・離婚・別居などの理由	6
⑥日常の買物や趣味など生活環境の理由	8
⑦福祉・医療・介護など環境の理由	1
⑧周囲の居住環境の理由	8
⑨防災・防犯などの理由	1
⑩通勤・通学・買物など交通利便性の理由	12
⑪古都としての歴史的環境	15
⑫海がある	15
⑬緑など自然環境が豊か	18
⑭閑静な町並み	13
⑮子育てに良い環境	4
⑯市の子育て支援策のため	0
⑰鎌倉というブランドイメージ	7
⑱活気がある	1
⑲その他	11



(グラフ 4-1 鎌倉市転出入市民意識調査より筆者作成)

(表 4-1 鎌倉市転出入市民意識調査より筆者作成¹⁴⁾)

¹⁴ <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/keiki/documents/h18tenshutunyuu.pdf>

転出入市民意識調査のうち、転入市民の「鎌倉を居住地に選んだ理由」のアンケートでは⑬緑など自然環境が豊かがトップで、次に⑭海がある・⑪古都としての歴史的環境、⑭閑静な町並み、と続いている。アンケートは北鎌倉地区ではなく鎌倉市全体でとったものであることを考慮する必要はあるが、北鎌倉に関連するものでいうと、転入市民は自然環境・歴史的環境・閑静な街並みを求めていることがわかる。住みたい行政市区ランキング 8 位の鎌倉市の持つ自然環境・歴史的環境・閑静な町並み等、転入を希望する人々にとっての「憧れ」もしくは「理想」なのかもしれない。このような「憧れ」を抱いて転入する転入者は、東京のベッドタウンとしては特殊である北鎌倉のコミュニティ、風習、生活にも比較的楽に適応することが予想される。一般的に現代の多くのふつうの町には、多様な出自の多様な価値観を持った人びとが集まる異種混交の地域社会があり、同じ場所に暮らしていても、職種も職場もマチマチで共通の目的意識も規範も、人びとの共同作業も、必然的には成立しにくくなっている、とされる(中村良夫・鳥越皓之,2014,p.213)。しかし、北鎌倉においては地域の歴史と現状が醸し出す理想のイメージ・価値観が存在している。その理想のイメージ・価値観が地域住民には軽い同調圧力となり、「憧れ」となり転入者を呼ぶ原因となり、馴染めないものにとっては「古臭いコミュニティ」となり地域から出て行かせる方向に働いているのではないかと。これらの結果、職種も職場もマチマチで共通の目的意識も規範も共同作業も成立しにくい人びとが暮らす近代都市において、地域の共通のイメージが人びとの価値観をまとめ上げ同じ方向を向くことにより、地域構造が維持されてきたと結論付けたい。

5 章 北鎌倉の重層的な地域構造

5-1 地域変容過程の分析

北鎌倉地域における地域変動をどう捉えればよいのか。山ノ内、台ともに明治以降の地域開発・商品経済・モータリゼーションなどの「近代化」による外的圧力と、産業構造変化(台地区の農業⇒住宅地が典型例である)、人口流出・コミュニティ弱体化などの地域内部の変化にさらされてきた。山ノ内地区はかつて門前町であり「匠の町」であったが、明治以降の交通の発展により東京や横須賀など重要拠点のベッドタウンと化し、近年も人口流入が続いている。また、台地区はかつて農村だった地域も多いが、近年の日本の産業構造の変化に伴い、農家の数は減少し、それに付随していた里山が失われていた。その中で、町内会・商店街・寺社仏閣・NPO 法人・鎌倉市など各アクターが、自分の理想とする「北鎌倉」を維持保全するために様々な運動を行い都市が形成されている。

また、北鎌倉は旧鎌倉や大船と違い、高層ビルや高層マンション、ショッピングセンターや大工場など近代化が生みだした大施設は少ない。家業的商店街・門前町景観が残っており、自然保護運動がかつてから盛んであったこともあり、近年に入ってから大規模な再開発はなされず、閑静な住宅街が宅造されるにとどまっている。鎌倉時代には旧鎌倉の外地であったため、宗教施設のみが建てられ権力施設が立地しなかった北鎌倉は、室町、江戸時代においても同様であり、近代に入ってから東京・横須賀・大船等の大都市の外地となり、ベッドタウンとして住宅施設が建てられることになった。ある意味では、鎌倉時代から現代まで旧鎌倉・大船・東京等「都市」にとっての「郊外」とどまっていたのではないかと。また、かつての村落的社会であれば、環境的にも技術的にも社会的にも制約条件があり、一定の目的意識や価値規範＝「同質的思考」を共有しながら、そのメンバーとしてともに生きる「共同」という側面を持っていたはずであり、その場での生活景観・風景・習慣・価値はそうしたさまざまな制約条件のなかで成立してきたものであったとされている。また、一方で、現代の多くのふつうの町には、多様な出自の多様な価値観を持った人びとが集まる異種混交の地域社会があり、同じ場所に暮らしていても、職種も職場もマチマチで共通の目的意識も規範も、人びとの共同作業も、必然的には成立しにくくなっている、とされる(中村良夫・鳥越皓之,2014,p.213)。しかし、鎌倉では風致地区・景観地区・歴史的風土保存地区など様々な「法律」という社会的な制約条件があり、また既存住民も積極的・消極的にまちの環境維持に貢献してきた。平成18年に

行われた鎌倉市の転出入市民意識調査では、多くの転出入市民が鎌倉市のみどりに好印象を持っていた。また多くの転入市民が「鎌倉らしさ」として歴史環境とみどりについて触れ、実際に転入してくる際の決め手にもなっている。東京のベッドタウンとしては決して利便性に富むとは言えず、地場産業も東京や横浜に比べれば少ない鎌倉が居住地として選ばれるのは、明治期も昭和期も現在も「歴史環境」と「みどり」が豊富だからであろう。北鎌倉の歴史環境やみどりが維持されている原因は、かつてから現在にかけて、「歴史環境」や「みどり」という価値観を大事にする人が居住し、またそれらを大事にする人々が流入してきており、彼らが様々な立場から街に働きかけている結果、現在の地域構造が成立していると考えられる。

5-2 北鎌倉「らしさ」と今後の北鎌倉

鎌倉市の自然保護を巡る市民運動の先駆者のひとりである原実は、『歴史的風土の保存―鎌倉市民の日々―』において鎌倉の未来について次のような私見・仮説を立てている。

①歴史的保存区域(以下保存区域と略)は全市域の約24パーセントにすぎないのだから法に従いこれだけ保存されたとしても鎌倉市が「古都」として保存されることはとうてい不可能である。②一方すでに私たちが主張してきたように、歴史的風土はもともとそれと一体のものとして存在してきた市街地と調和したものとして都市計画が行われなければならないとして、その市街地とは、やはり幕府らしいの、八幡宮参道若宮大路を中軸とした都市構造を継いで現在あるいわゆる旧鎌倉のそれに限定せざるをえない。③しかも、その旧市街地にも、例えば京都で成功したように、祇園新橋、清水産寧坂のような、部分的ながら歴史的伝統的町なみの修景工事によって保全できる、あるいは保全価値のあるものがない。④そこで、鎌倉幕府滅亡後、都市としての発展がと絶え、明治期に入って住宅地、別荘地として復興するにつれて造られた鎌倉の新市街地は、この自然と歴史の息づく豊かな環境(現在の歴史的風土)に魅かれて移住してきた人たちの心の表われ(創造)であり、それが「歴史的」といえなくとも、一つの伝統を築いた一戦災から免れたためなお身近に遺っているその伝統(例えば閑静な環境)は、それを守ろうとする市民の心とともに、尊重され保存され、今後の都市計画に活かすべきである。⑤そのためにも、もつとも必要なのは、鎌倉ももとの歴史的風土と、これは京都、奈良にもない海の自然の保存である。そのさい、市民の生活環境との関連における要点は、その景観を市民の視覚から原則として遮断してはならぬということである。そのために建造物の高層巨大化は厳しく規制しなければならない。これが専門家のいうアメニティを鎌倉の場合にあてはめるものである。⑥避けがたい近代化はむしろ積極的に以上の配慮のなかに取り入れるべきである。

また、同書では次のようにも述べている。

鎌倉は、歴史的伝統をひろく継承している大都会京都などちがいが、また開発からのこされた僻地の歴史的町なみとちがいが、部分的に観光の対象として修景保全する元もたない都市である宿命から、むしろ、その宿命を観念し、いたずらに現在の観光化の傾向に媚びることなく、とくに見どころをつくるよりも町全体をいわゆる「鎌倉らしい」ものに創りあげることが先決で、観光政策はその方向に従うべきであろう。その方針が確立すれば観光被害に現れる矛盾は自ら解決するはずである。そのための都市計画の基本はなによりも「鎌倉特有の自然と歴史を生かすこと」に帰する。

上記の文章は非常に示唆的である。原は鎌倉、特に旧鎌倉について上記の文章を書いているため、北鎌倉とはずれる部分も多少あるが、多くのことが北鎌倉にも適用できると考えられる。特に②③④で述べられていることは示唆的である。②③では、源頼朝以来の都市計画がある旧鎌倉であっても鎌倉幕府、そして室町時代の鎌倉幕府滅亡後関東の戦乱によって灰燼と帰した鎌倉には鶴岡八幡宮など歴史的伝統的なスポットは残っていても、

「歴史的伝統的町並み」は存在しない。また、歴史的建造物も鎌倉時代の建造物は鎌倉大仏と他に数点あるくらいで、建造物のほとんどが室町時代や江戸時代以降の再建である。事実、国宝建築は1棟だけ(円覚寺舍利殿)であり、伝統的建造物群保存地区に至っては存在していない。そのため京都のような伝統的建造物群保存地区に指定することによる文化保存のスタイル(京都や同じ古都である奈良や、倉敷や川越など90市町村で110地区の例がある)は鎌倉には適用できないと主張している。これは北鎌倉においても同じであり、円覚寺・建長寺をはじめとした歴史的な社寺は残っているものの、「町並み」は円覚寺・建長寺が建設された当時のものでも、門前町・匠の町として完成した江戸時代のものでもなく、明治時代以降の近代化によって建設された町並みである。また、「町並み」という「景観」や「風景」と呼ばれるものは、人びとが様々な時代や歴史状況の中で変化していく様式をもって自然へ働きかけること、によってつくられるものである。だからこそ、京都や川越や倉敷は「町並み」という景観をそれぞれの社会の自然観や社会観や価値観や社会生活の成り立ちを表象しているもの＝伝統文化として捉え、それを保存している。北鎌倉において一度途切れてしまった鎌倉時代・足利時代の住居建築を復元したとしても、その背後に人びとの生活がなく、ただの「観光スポット」となってしまう危険性がある。

しかし、④で「この自然と歴史の息づく豊かな環境(現在の歴史的風土)に魅かれて移住してきた人たちの心の表われ」は一種の「伝統」であると記している。北鎌倉において、歴史的風土とは円覚寺・建長寺をはじめとした禅宗寺院とその背後に広がる谷戸の自然景観である。この歴史的風土たる禅宗寺院が建立されるに従い、禅宗寺院と深い関係を持つ「匠の町」である門前町が完成する。交通の利便性だけでなく谷戸の落ち着いた自然景観を求め明治以降には高級住宅街が建設され、それらの人を相手とした商店街が形成される。昭和以降は人口増大もあり谷戸に住宅街が形成されはじめ、一方で昭和後期まで谷戸という地形を利用した農業・林業形態である「里山」を持つ地域が存続していた。これらはみな、北鎌倉の自然と歴史の息づく豊かな環境に魅了された人たちが生活するうえで生み出した「文化」なのではないか。鎌倉が「古都」と言われるゆえん、そして北鎌倉が鎌倉よりも「鎌倉らしい」といわれるゆえんは、伝統的建造物ではなく、禅宗寺院とその周辺の門前町、そして谷戸の自然に息づく閑静な生活環境・自然環境であり、それが「鎌倉らしさ」「北鎌倉らしさ」なのではないか。

その上で、原は「とくに見どころをつくる」ことよりも、「町全体をいわゆる「鎌倉らしい」ものに創りあげること」の重要性を訴えている。そのための基本は「鎌倉特有の自然と歴史を生かすこと」であると述べられているが、北鎌倉においても、「北鎌倉特有の自然と歴史を生かすこと」なのではないか。つまりは、禅宗寺院の門前町としての歴史・高級住宅街と商店街としての歴史・閑静な住宅街としての歴史・谷戸を利用した「里山」としての歴史、そしてこれらを支えてきた自然を活かすことである。ここ数十年でも北鎌倉の変貌は著しい。観光客が増大しゴミ問題が叫ばれるようになり、交通渋滞もいっそうひどくなっている。また、少子高齢化も差し迫った問題となっている。相続の関係で土地が細分化され、北鎌倉には一層新規住民が流入してくることが予想される。このかつてない状況で「北鎌倉らしさ」を維持するためにはなにが必要だろうか。「歴史的風土」のみであれば円覚寺・建長寺をはじめとした寺社仏閣が健在な限り保全されるであろう。しかし、門前町や商店街、里山景観などはそれを利用する人がいなければその生活景は失われてしまう。現状までは、北鎌倉は文化を維持する傾向にあった。しかし、今後「住む」あるいは「観光する」都市として選ばれるためには、もう少し創造的になる必要がある。ありきたりではあるが、「北鎌倉特有の自然と歴史」が生み出す街のメリット・デメリットを認識した上で、メリットを増強しデメリットを少なくしていく政策が行政には求められる。また、鎌倉は歴史的に住民自治がさかんな都市でもある。それにはまず住民ひとりひとりが自分の街「らしさ」を認識する必要がある。北鎌倉は地理的にも経済的にも、ただの「ベッドタウン」になってしまえば他都市に勝ち目は無い。北鎌倉が今後人口減少による都市間競争に勝つためにも、「北鎌倉らしさ」を維持、あるいは発展的に継承するためにも「ローカル・ガバナンス」が今後さらに求められてくるのではないか。

終章

終-1 総括・意義

(i) 総括

本論文は古都・鎌倉の中でも特殊な地域性を持つ北鎌倉地区を対象に、北鎌倉地区の持つ重層性、共通のイメージを明らかにし、それらがどのように維持保存されてきたかを解き明かすことを目標に論を進めてきた。

序論では、筆者の問題意識、調査対象地、研究方法、論文形式を記した。

1章では、鎌倉についての基礎情報と「住みたいまちランキング」らを使い鎌倉の基礎イメージについて紹介し、その後地域紙を参考に、「北鎌倉」地域を定義した。そののちに鎌倉・北鎌倉の歴史を記述した。

2章では、北鎌倉地区の現在についてより詳しく掘り下げた。具体的には、北鎌倉を構成する山ノ内地区と台地区について、地理・統計・都市計画・法律等のデータを使って詳細を記述したのち、地域住民の持つ「落ち着いた街」と「自然に囲まれた街」というイメージについて考察した。また1章と合わせて、北鎌倉が①鎌倉時代以来の歴史的風土②江戸時代以来の「門前町」③明治時代以来の「住宅・商店」④昭和時代までの「里山」で構成されていることを明らかにした。

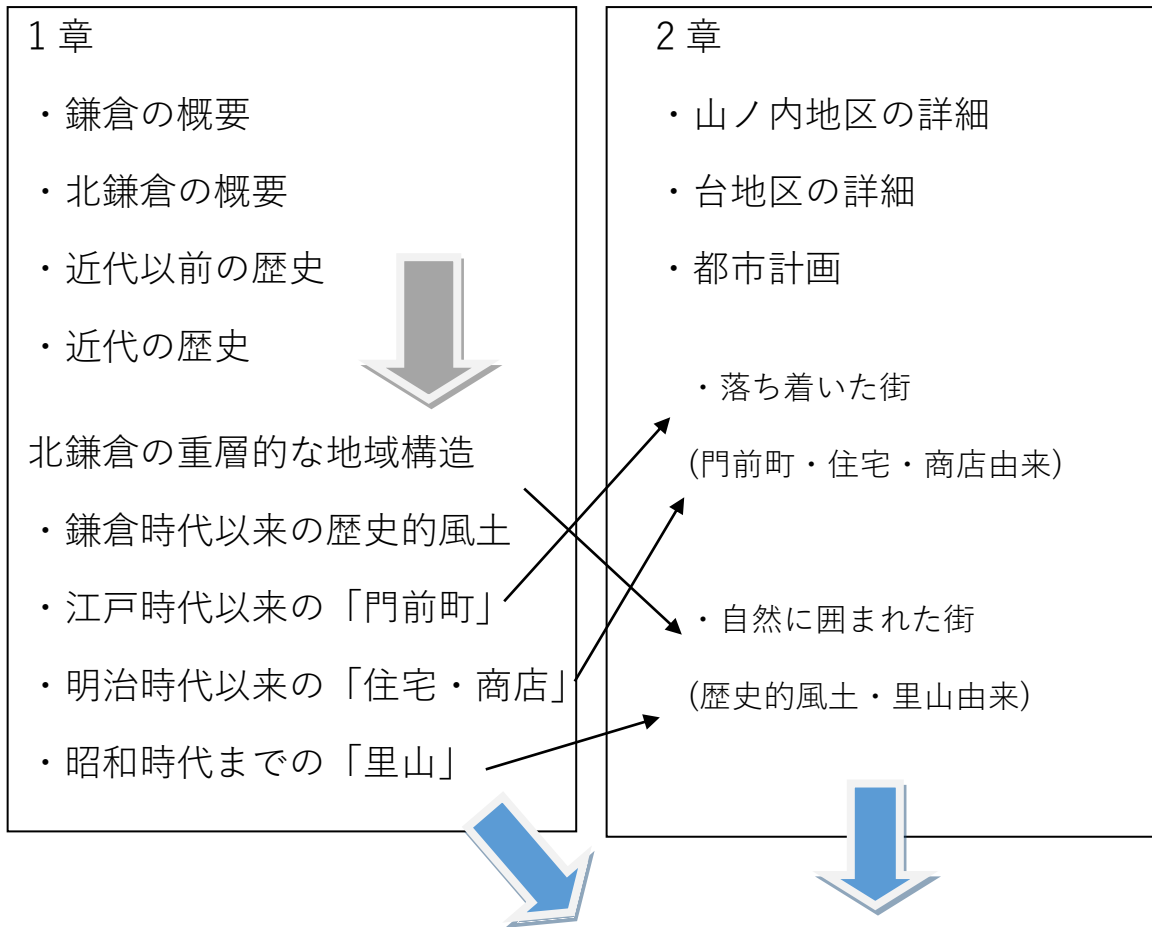
3章では、古都におけるまちづくりの先行研究として京都市、および京都市六角町の事例を取り上げ、鎌倉市、および北鎌倉地区との違いを整理した。この章では都市を見る視点として「外からの視点」と「内からの視点」があることを取り上げた。

4章では3章を踏まえ、1章2章で明らかにした北鎌倉の構造が現在も維持される要因を明らかにした。

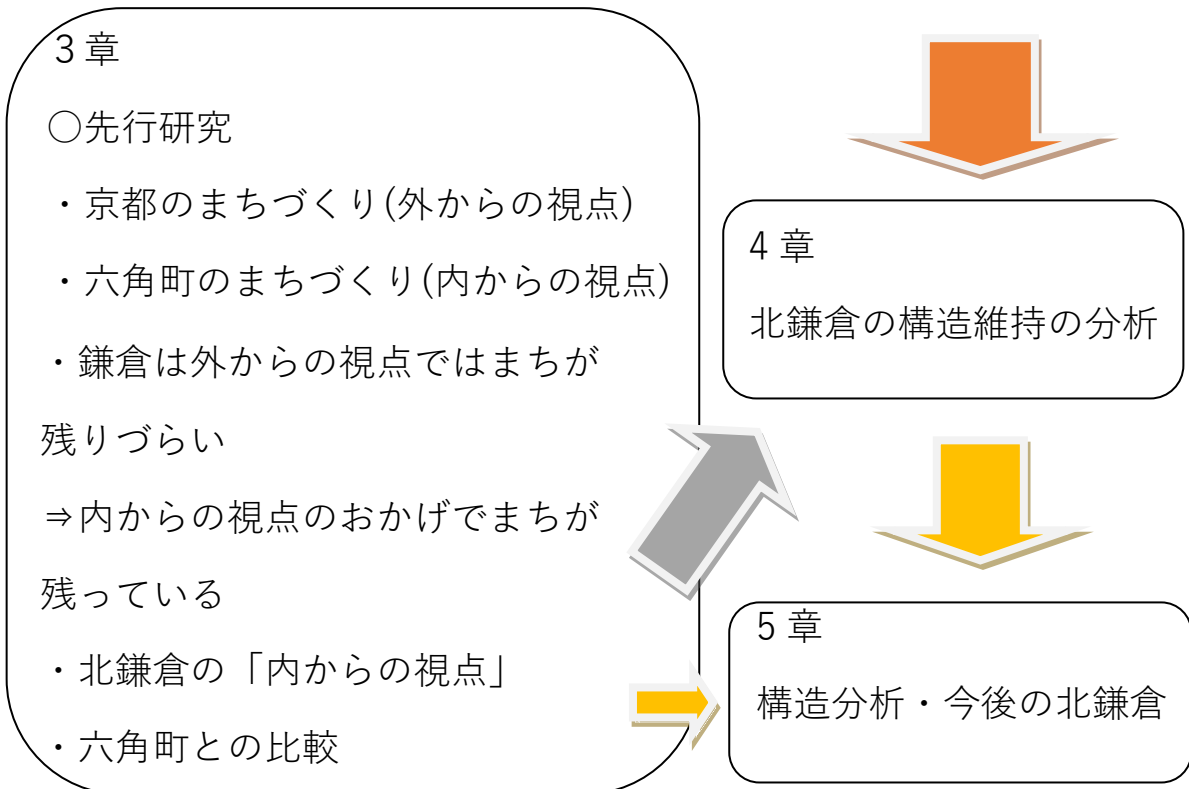
5章では、4章の内容をまとめたのちに、原実氏の著書を踏まえ、今後の鎌倉、北鎌倉のまちづくりの方向性について提言を行った。

地域構造の成立過程

地域構造の維持要因



☆北鎌倉のイメージ形成



(ii) 意義

昨今は「鎌倉学」がブームになっていると聞く。しかし、中世鎌倉の研究や近代鎌倉の研究は多いものの、中世から現代まで総括的に記述した鎌倉研究は少ない。また、大船のように、近年は郷土史研究が盛んになっている地区もある。しかし、本論文でとりあげた北鎌倉地区は、円覚寺史・建長寺史のように寺社の各論はあるものの、門前町を描いた郷土史は多くない。また、現代の研究も少なく、近代の研究に至っては全くされていないと言ってもよい。そのため、本論のように北鎌倉地区のありようを中世から近世、明治から現代まで総括的に記録することには価値があると考えます。

また、鎌倉では「古都とはいえ鎌倉には歴史的なまち並みの集積がなく、様々な時代や様式の建物が混在し、景観づくりの方向性を共有しにくい」という課題が存在していたが、これに一つの答えを付与することができたと考える。つまり、歴史的なまち並みの集積がない北鎌倉においては「伝統的建造物群保存地区」のような保存方法は行えない。しかし、その街では、建物というよりも門前町や商店街の伝統、つまり生活景を維持することにより景観保存が可能になるのである。この景観において重要なのは、「景観の背後に人々の生活がある」という点である。柳田国男は著書「美しき村」にて「村を美しくする計画などというものは有り得ないので、或いは良い村が自然に美しくなっていくのではないかとも思われる」と述べている。また、5-2 でも述べたが、原実は「鎌倉は、歴史的伝統をひろく継承している大都会京都などちがひ、また開発からのこされた僻地の歴史的町なみとちがひ、部分的に観光の対象として修景保全する元もたない都市である宿命から、むしろ、その宿命を観念し、いたずらに現在の観光化の傾向に媚びることなく、とくに見どころをつくるよりも町全体をいわゆる「鎌倉らしい」ものに創りあげることが先決で、観光政策はその方向に従うべきであろう。」と述べている。これらの言いたいことは似通っている。つまり、町を美しくするために理想のハコモノを建てるよりも、その町の人々の生活にあった、それらしいものを建てる方が、結果的に町の魅力につながるのである。原のいう「歴史的伝統をひろく継承している大都会」は京都や奈良の一部など片手で数えるほどしかなく、「開発から残された僻地の歴史的町なみ」は原が私見を述べた後にどんどん開発され取り壊されてきた。現在では、歴史的町なみはないが、経済力では都心に勝てないため観光業に頼るしかない、という地方も多いことであろう。北鎌倉は日本を代表する禅宗寺院の門前町であり、近代以降はエリート層の居住地であって特殊な事例かもしれない。しかし、東京のベッドタウンを考えるうえで、また地方の観光都市を考えるうえで、北鎌倉のたどってきた道筋は一つの参考になりうると考えられる。以上をもって、本論文の意義とする。

終-2 謝辞

子どものころ、しばらく北鎌倉で生活したことがあります。東京育ちの私にとって、お祭りが盛んで、昔のドラマに出てくるような肉屋さん、八百屋さんがあり、自然に囲まれている北鎌倉という街は興味深い街でした。また、北鎌倉駅から電車で数分行けば近代的な繁華街である大船駅に到着します。なぜ、あんなにも都心に近い場所に自然が残っているのか、昔ながらの店が残っているのか、という単純な疑問が本論文の出発点でした。

本論文は、「鎌倉」ではなく「北鎌倉」に焦点を当てた論文です。「鎌倉」に関する研究は盛んであり、北鎌倉でも円覚寺・建長寺等各寺院の研究こそ盛んなものの、郷土資料が少なく、特に近代の資料は皆無に等しいため、地元の北鎌倉の皆様のお話がなければ完成させることはできませんでした。同じ北鎌倉に居住していても様々な人がいらっしゃいます。お寺に詳しい方、神社に詳しい方、里山に詳しい方、歴史に詳しい方、自然に詳しい方…北鎌倉に居住していらっしゃる様々な人の話を聞くにつれ、断片ずつではありますが、北鎌倉の重層的な地域構造が明らかになっていきました。私の拙い質問にも真摯に回答してくれ、またいろいろなお話をしてくださった北鎌倉の皆様には感謝してもしきれません。

また、話を聞いてくださり最後まで否定はせずに見守ってくださった浦野先生、いつも励ましてくださった先輩方、遅い時間まで発表にも真剣に耳を傾けてくれた3年生の皆様にも深く感謝したいと思います。そして、この2年間お

互い切磋琢磨しあい、時にはゼミ後、時にはお酒を飲みながら議論し、雑談をし、相談に乗ってくださった同期の皆様には本当に感謝しています。

皆様の支えがあって、このゼミ論文を完成させることができました。本当にありがとうございました。

参考文献・資料・URL

- 天野久弥『いざ鎌倉 御谷騒動回想記』御谷を考える会 1984
石山昌司『大船の歴史』北鎌倉台土地区画整備組合 2006
今田高俊編著『産業化と環境共生』ミネルヴァ書房 2003
大西國太郎『都市美の京都 保存再生の論理』鹿島出版会 1992
片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社 2000
鎌倉市教育委員会『としよりのはなし』鎌倉市教育委員会 1971
鎌倉市市史編纂委員会『鎌倉市史 近代通史編』吉川弘文館 1994
鎌倉市市史編纂委員会『鎌倉市史 近世通史編』吉川弘文館 1986
鎌倉市都市計画部都市計画課『古都保存法施行四十周年記念誌—鎌倉の歴史的風土を守るために—』2007
北鎌倉湧水ネットワーク『ガイドブックに乗らない北鎌倉の神々』夢工房 2008
北鎌倉湧水ネットワーク『里山ってなんだ！「やま」の手入れはなぜ必要なの？ 鎌倉の美しい里山継承プロジェクト3年間の足跡』夢工房 2014
古都保存財団『古都保存法三十年史』1997
椎名慎太郎『歴史を保存する』講談社 1983
自治体景観政策研究会『景観まちづくり最前線』学芸出版社 2009
高槻成紀『唱歌「ふるさと」の生態学』山と溪谷社 2014
土岐寛『景観行政とまちづくり』時事通信社 2005
鳥越皓之編『講座環境社会学 自然環境と環境文化』有斐閣 2001
中村良夫・鳥越皓之『風景とローカル・ガバナンス』早稲田大学出版部 2014
中村良夫『都市をつくる風景』藤原書店 2010
西山卯三『歴史的環境とまちづくり』都市文化社 1990
野口稔『ナショナル・トラストの風』夢工房 2001
原実『歴史的風土の保存』アカンサス建築工房 1989
樋口忠彦『日本の景観 ふるさとの原型』筑摩書房 1993
三浦勝男『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版 2005
湯山学『鎌倉北条氏と鎌倉山ノ内』光友会 1999

鎌倉市景観計画 2007年1月

鎌倉市歴史的風致維持向上計画 2015

鎌倉市民社「鎌倉市民」1961

北鎌倉の景観を後世に伝える基金委員会「北鎌倉の風創刊号」夢工房 1999

北鎌倉の景観を後世に伝える基金委員会「北鎌倉の風2号」夢工房 2000

北鎌倉の景観を後世に伝える基金委員会「北鎌倉の風3号」夢工房 2001

北鎌倉の景観を後世に伝える基金委員会 「北鎌倉の風 4 号」 夢工房 2003
北鎌倉の景観を後世に伝える基金委員会 「北鎌倉の風 5 号」 夢工房 2004

澤田和華子 「鎌倉における住宅地の形成過程について」 日本建築学会 2003
高橋睦 「円覚寺に見る古都鎌倉における宗教的谷戸空間の景観構造に関する研究」 日本造園学会 2003
高橋睦 「建長寺に見る古都鎌倉における宗教的谷戸空間の景観構造に関する研究」 日本造園学会 2005
谷口浩司 「京都六角町の町内と町内組織」 佛教大学総合研究所 1996

大船地域づくり会議 <http://o-f-n.jp/about/09oofuna1/index.htm>

鎌倉市

鎌倉近郊緑地特別保存地区 <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/midori/kintoku.html>

景観地区 <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/keikan/keikantiku.html>

古都保存法とは <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/fuuchi/kotohoozonhou.html>

指定文化財件数一覧表 <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/treasury/documents/siteitiran.pdf>

都市マスタープラン https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/plan/index_masterplan.html

緑の基本計画 <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/midori/miki.html>

山崎台峰緑地基本構想 <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/koen/dai-kousou.html>

緑地保全 https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/sangyou_machi/ryokuchihozen/index.html

北鎌倉さとやま連合会 <http://kitakama-satoyama.com/>

京都市内の文化財件数一覧 <http://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/0000005958.html>

住みたい街ランキング 2016 http://suumo.jp/edit/sumi_machi/

全国都市ブランド力調査報告書 <http://www.gain-www.com/admin/files/toshibrand-report.pdf>

e-Stat <https://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>